

四、内容につき問答する。

教材の「文章」の部参照。

五、読み方の練習。

指名して——また自由に。

第二時

▽復習及び練習應用。

一、全文を自由に一回讀ませる。

二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

三、内容につき問答。

(1)、これはどうした手紙か。(2)、鈴木君はどういつたか。(3)、鈴木君の美しい心はどこに表はれてゐるか……等。

四、指名して二三名に誦讀させる。

五、見舞文の具備すべき要件、及び認め方等につき問答する。

六、練習・應用。

(一)漢字の書取。

病氣見まひ

御様子

日曜日

とうく

學校

どうしたのか

熱が出て

町の病院

組の人

寒い時節……等。

(二)家庭課題。

「友の病氣見まひ」——各自に對者を定め境地に合つたものを作り、正式に認めて提出させる

教授上の注意

一、本書簡文は友に對する情味が主になつてゐるのだから、その考で取扱はなければならない。

二、書簡文は普通の文と違ひ、社會的約束に掣肘され、之を無視する譯にいかないから、認め方に對する習慣又は作法につきても知らしめることを忘れてはならない。

三、書簡文に於てはその境地といふものが限定されて居る。換言せば特殊である。併し教授に於ては普遍化することも必要である。即ち特殊の境地から得た理解を他の境地に應用するといふ能力を説いてやることも大切である。家庭課題は此の點に於て意義があるのである。

四、本文には「拜啓」とか、「敬具」とか所謂形式上の起首とか、結尾とか言ふものがない。之は文の性質上からと親善な間だからとの條件に基くのであるから、其の考で取扱ふがよい。

第二十二 水引トノシ

要旨

形式上では、新文字の読み方・書き方・難語句の意義、語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、物品贈與の際に用ひる熨斗及び水引につき、その由來・用法等に關する知識を與へ、傍ら國民的風習の一斑を理解させるを以てその要旨とする。

教材

一、文字

「贈」——形聲文字で、好むものを贈與する義である。漢音は、「ソウ」、吳音は「ゾウ」で、訓は「オクル」である。

「變」——形聲文字で、改め更へる義である。轉じて、動く奇異・笑異等すべてかはつて定らぬ義に用ひるに至つた。音は「ヘン」で、訓は「カハル」等である。

「薄」——形聲文字で、林木の叢生せる義である。漢音は「ハク」、吳音は「ハク」で、訓は「ウスシ」・「セマル」等である。我が國では特にスキとも訓ずる。

「必」——會意形聲文字で、本義は分れる境の義である。分つて標識を立てれば決して違ふことなく、審かであるが故にカナラズと言ふ義が生じた。漢音は「ヒツ」、吳音は「ヒチ」で、訓は「カナラズ」である。

二、語句

「水引」紙捻に糊水を引いて乾し固めたもので、進物を結ぶに用ひる。備考部参照。「ノシ」方形の彩紙を細長い六角形にヒダをつけて折りたゞみ、其の中に熨斗鮑を小さく切つて張り、贈物にそへるもの。備考部参照。「歳ノ暮ニ方々カラ贈物ガ來タ」年末・年始には親族・知己・世話になる人々に物品を贈答するは我が國古來からの習慣であることを知らせる。「シキタリ」なし來つたこと。「ナマゲサ物」魚類を意味する。「ノシアハビ」あはびの肉を薄く長くはいで、引きのばして乾したもの。「コヨリ」紙を細く切つてよつたものをいふ。「カラヨリ」「かみより」と同じ。「元結」もとどりを結ぶに用ひる細いひもをいふ。古昔は麻絲又は組紐を用ひたが、今は専ら紙捻を用ひる。「不吉ノ時」人が死んだときなどのやうにめでたくない時をいふ。

讀み方の上に注意すべき語句

方々 贈物 後二人 印 形 真中 元結 紅白 不吉 黒水引 白水引

三、文章

本文は對話的説明文といつてよい。おてつといふ一少女が歳暮の贈物に、のしや水引のついてゐるのを見て疑問を起し母について聞くと、母はのしと水引との由來其他につき親切にいつて聞かせたことになつて居る。従つて文の主眼點は母の言葉の内にあることは言ふ迄もない。本文

を通して知るべき要點は次の如くである。

(甲)のしについては、

- 1、贈物の意義及びこれをなす場合。
 - 2、昔は贈物に多くなまぐさ物をそへたこと。
 - 3、次にノシアハビを用ひるやうになつたこと。
 - 4、今は折紙に熨斗鮑の薄片を附けることになつたこと。
 - 5、魚類や鳥類を贈るときにはのしをつけないこと。
 - 6、人の死んだときにも一切用ひないこと。
- 等である。

(乙)水引については、

- 1、昔は贈物をゆはへるに絲・こより・元結などを用ひたこと。
 - 2、其の後水引ができたこと。
 - 3、水引の種類と其の使ひ方。
- 吉時——紅白や金銀などを使用する。
凶時——黒水引や白水引を使用する。

等である。

区分

- 第一時 第一節(自八十五頁七行)を授く。
第二時 第二節(自八十八頁五行)を授く。
第三時 總括的復習及び應用。

教具

菓子箱(正式に包んだもの)の標本

熨斗(折紙のもの二三種と鮑のしたもの)

水引の種類

教法

第一時

▽第一節を授く。

- 一、目的を告げ、各自をして自由に一讀過させる。
 - 二、質疑に應答す。また主要の語句・語法等につき問答する。
 - 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませる。
 - 四、内容につき問答する。
- (教材の「文章」の部を参照し、内容の要點を確實に捕捉させる)

五、読み方の練習。

指名し、また各人自由に。

第二時

▽第二項を授く。

第一時に準じて授く。

第三時

▽總括的復習及び應用。

一、全文を自由に一回誦讀させる。質疑に答へ、また主要の語句・語法等につき問答する。

二、内容につき問答する。

親子の對話を通して熨斗及び水引の由來、用法等に關する知識を一層確實に意識させる。

三、誦讀の練習。

指名して、また各人自由に。

四、練習應用。

(一)漢字の書取。

歳ノ暮 贈物 水引 ナマガサ物ノ印 變ツタ 表ヘタ 薄イ肉 真中

元結 必ズカケル 紅白 金銀 不吉 黒水引……等。

(二)次の點線をうづめてましまつた文にさせる。

(1)ノシハ人ニ物ヲ………。

(2)昔ハ贈物ニハ………。後ニハ………。ソレガ又變ツテ………。

(3)水引ハ………。フダンノ贈物ニハ………、不吉ノ時ハ………。

教授上の注意

一、本課は贈物に對する國民的慣習即ち禮法の一斑を知らしめ様といふ考から出來たものである故に興味を以て讀んで行くうちに、さうした要求を自づと理解して行くやうに取扱はなければならぬ。

二、本課の内容を吟味するとき挿畫と交渉すべきは勿論、尙實物をも示して、熨斗や水引等に關係する觀念を明確に與へる。

三、本課の教授に附帶して。

1、菓子箱の包み方。

2、水引のかけ方。

3、熨斗のおき所。

等につき補説することも無用ではない。

四、本課にのみ限つた譯ではないが、語句の讀み方、意義、漢字の書き方等に對しても適當に努力することを怠つてはならない。讀本教授に於ては形式方面の習得も大切な要求であるからである。

備考

ノシ

方形の彩紙を細長き六角形にヒダをつけて折疊み、其の中に熨斗を小さく切りて張り、贈物に添ふるものの特稱。形は本課の挿畫にあり。即ち右方の二つは今いふ所の熨斗にて、普通に用ひらるるもの、左邊にあるは長熨斗とて、熨斗を長きままに用ふるものなり。

熨斗は熨斗籠の略なり。延長の義を取りて、昔より慶事の贈答結納等には必ず其の物品に添附する風習なり。熨斗籠は古くは長蛇又は藻籠とも稱せり。蛇の肉を紙の如く薄く延べて束れたる黄色半透明の乾物なり。これを製せんには、先づ籠の殻を去り、肉をよく洗滌して、板の上に載せ、長さ一尺五寸許、圓き二寸の丸棒にて肉を打撃し、肉の緊りて堅牢となりしとき、庖刀にて端より干瓢を製する如くに剥き竿にかけて下端に小石を附け、陰干にすること二時間許、十分延びたる席に擲けて、日乾にするなり。されど、これは最上等の品にして、價高し。現今普通に用ひらるるは、布海苔の熨斗なり。製法は、普通の布海苔を煮熟し、山梔子を加へて黄色を附け、之を琉球席の上に流し、乾燥せしめて載るなり。熨斗には、右の外、折熨斗、繪熨斗、書熨斗等あり。折熨斗は略式にして、熨斗包の紙をそのまま代用するもの、即ち包紙を折りて、中央に熨斗の小切を貼付けたるものなり。この熨斗最も普く行はる。繪熨斗折熨斗の略式にして、折熨斗の形を印刷したる紙なり。書熨斗は最も略式のものにて、紙包の上に筆にて「のし」と書くなり。

我が國は古來魚類を尊びたるを以て、贈物には必ず魚類を添へたりしが、その後、この風變じて、代りに熨斗を添ふに至れるならん。古く日本紀我名抄に熨斗籠のこと見え、平治物語に「打籠、延喜古式長籠」などの語見ゆ。又東鑑に「例進長蛇千五百帳」とあり見れば、當時は儀式用のみならず、食物にも用ひしにや。閑窓瑣談に、熨斗籠を長生不死の藥とし、熨斗籠を水に漬し、煮く食するときは、精を増し、命を長すとあり。後世に至りては、正月年賀の飾物・嫁娶・結納の印には必ず之を用ふこととなり、藝人に贈る引幕にも亦これを彩色して染め出す等、一種の裝飾用として用ひらるゝに至れり。

熨斗を挟む紙の由来

日本風俗史、平安時代の條に左の一節あり。参考すべし。物を贈るには、大抵木の枝などに結びつけて、使者に持たするなり。これ上古より神を祭るに幣鏡等の供物を直ちに手に觸れず、神の枝に結びつけて奉りし遺風にて、これに當時の風流なる心を加へ、贈物はその季に合ひたる花の枝につけ花の枝に懸けがたき筥などにも、原の心を失はで、なほその端に小さき花枝を結びつけ、こころを心葉といへり。古は眞の花を用ひたるが、後には剪線の花、または總角を用ふるに至れり。遙か後世に至りて、祝賀の贈物には、酒樽などに紙もて作りたる蝶の形をつくるも、祝筵の長柄の鎗子に蝶の形をつくるも、また贈り物に添ふる熨斗を挟むに、紙をいろ／＼に疊みて用ふるも、皆心葉の遺風ならん。

進物の包方

紙二枚重ねて包み、大物ならば纒重ねに並べて包むべし。水引は紅白若しくは金銀を用ひ、丸物ならば、片わなに結びてわなを左にす。これ引解くに便ならしめんがためなり。平物ならば、兩わなに結ぶ。品物に其の物の名を書くことは正式にあらす。物の内容數量多くして、特に名と數とを記す必要あらば、別に目錄を添ふべし。故にすべて物を包むには、物の兩端の包紙の上下より見ゆるやうに包むべし。紙の内に全く包みこむは禮にあらず。されど藥・香等の如く、こぼるるものを包むときは、必らず包みこむべし。又箱物などにて中の品物の外より見えざるものは、箱の蓋に物品の名を書きて、包紙には書かぬものと知るべし。

水引の結び方

第二十二 水引トノシ

水引は、關東にては多く紅白を用ひ、關西にては主として紅色・金色の染分を用ふ。その結び方は、何れも紅の方を右とし、中央にて結ぶ。俗間にては普通の時の進物には花結びとし、婚禮の贈物等には結び切とし、包紙も二枚を用ひ、水引も二本揃へて掛け、再び用ひざるを意味すといへり。弔慰の贈物には多く黒と白との水引を用ふ。又略しては、元結を用ふることもあり。いづれも結び切とす。(以上日本家庭百科事彙に據る)

第二十三 雪合戦

要旨

形式上では新文字の読み方・書き方・難語句の意義、語法其の他につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では壯な雪合戦を歌つた歌をとほして、讀者の元氣を鼓舞し、活躍的氣分を旺盛にするを以て要旨とする。

教材

一、文字

「互」——形象文字で、機械で繩をねち合す形を象つたのである。轉じてタガヒに等の義となつた。漢音は「ゴ」、吳音は「ゴ」で、訓は「タガヒニ」等である。

二、語句

「雪の原」——こゝは一面に雪のふりつもつた庭(運動場)等として知らしめてよい。「立別れ」別

れるの意。「聲の下」戦の「用意」「始め」の號令がかゝるとすぐにの意。「手にく飛ばす雪つぶて」「雪つぶて」は雪で作つたたまをいふ。一句は「めい／＼が雪のつぶてを手にしてなげとばす」といふ意味である。「ひるむひけふる者」雪のつぶてがあたつたが爲に、おそれて進まないひけふるものをいふ。「がうの者」すぐれてつよいもの。「げきせん今と見る中に」今やまさに激戦の真最中であるとき。「休戦」戦をやめる意。「どつとどつときの聲」「どつと」はおほぜいのものが一同に聲をたてるさまにいふ。「ときこの聲」はおほぜいのものが一同に出す聲をいふ。

読み方に注意すべき語句

雪合戦 ゆきあひせん 朝 あさ 聲の下 こゑのした 中に うち 後 うしろ 一度 いちど

三、文章

本文は雪合戦の勇しい境地を生命にしようたつた詩の文である。全文は三齣から出来て居て、第一齣は

朝日輝く雪の庭で、全軍が東西二組に分れ、用意！始め！の合圖で、互に雪の彈丸を手にとつて、雨霰のやうに盛に投げ飛ばしてゐる光景。
を歌つたのである。第二齣は
彈丸が、中つてもひるむ所なく、敵・味方が互に進み寄つて、雪を蹴散らし雪をあび、双方入亂

れて奮戦してゐる境地。

を歌つたのである。第三齣は

かく激戦の真最中に、戦ひ止め！のラツバの音高く響き、東西の兩軍は一同にときの聲をあげてさつと引上げた光景。

を歌つたのである。格調は例の七五調である。平静から激動に入り、激動から平静に歸つた高い波動のある詩の文である。

區分

第一時 全文を授く(形式上に重きを置いて)

第二時 全文を授く(内容上に重きを置いて)

教法

第一時

▽全文を授く。

一、目的を告げ、各自をして自由に一讀させる。

二、各齣につき彼等の質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

三、各齣につき讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀まさせる。

四、内容につき問答する。

(教材の「文章」の部を参照して)

五、誦讀の練習。

指名して——また各人自由に。

第二時

▽全文を授く。

一、全文を自由に一・二回誦讀さ、次に彼等の質疑に答へ、また主要の語句等につき問答する。

二、内容につき問答。

(1)、美しく晴れた雪の庭の光景——全兒童が東西に分れて力んでゐる有様——用意！始の！勇しいラツバの響き——雪の弾丸を雨霰のやうに投交はす壯觀。

(2)、冷い雪の彈丸が中つてすぐにひるむ弱武者——恐れず、進んで行く剛の者——敵味方が叫びながら近寄つて行く光景——雪を蹴散し、雪を浴びつゝ入亂れて戦つてゐる壯絶快絶の境地。

(3)、激戦の真最中、高くひびく休戦のラツバ——東西の兩軍が一度喊聲を上げて引揚げる光景——双方互に罵る、笑ふ、叫ぶといふ後の騷擾の境地、

等。

三、朗讀。

指名して——また一齊的に。

四、漢字等の書取。

雪合戦 晴れた朝 雪の原 用意 ひるむ ひげふ者 進むがうの者 雪を浴ぶ 互に寄する敵・味方 休戦 ときの聲……等。

教授上の注意

- 一、本詩の内味を如實に味ふには勿論彼等の經驗が背景たるを要する。併しこの種の經驗のない暖國の兒童にあつては、本内容を繪にした適當な掛圖を示し、理解や想像を容易にするがよい。
- 二、本詩の教授時數を二時としたけれども、兒童の力に顧みて三時間にしてもよい。
- 三、本詩の記載方は「晴れたる朝の雪の原」といふ風に、七と五との間に空間を置かないで、續けてかいてある。之がため兒童は或は一動律に讀んで仕舞ふかも知れない。若しさうなると、詩の讀み方としてはまづいから、二動律に讀んで行くやう注意する。
- 四、幾度も言つたことではあるが、詩即ち本文を散文に改作したり、談話に直させたりすることは禁物である。詩はどこまでも詩其の儘の形に於て讀ましめ、幾度も〴〵繰返し讀んで行くうちに自づと其の深味を味ふやうに指導する。

第二十四 寒い國々の人

要旨

形式上では新文字の讀み方・書き方・難語句の意義、語法其他につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、興味を中心として寒帯地方に於ける住民の生活を知らしめ、傍ら世界的見聞を擴めるを以て要旨とする。

教材

一、文字

「穀」——形聲文字である。黍・稷・秣・稻・大豆・小豆・麥等タナツモノの總稱である。音は「コク」で、訓は「タナツモノ」である。

「帽」——會意形聲文字で、小兒のカブリ物の義である。廣くバウシの義に用ひる。漢音は「バウ」、吳音は「マウ」で、訓は「バウシ」である。

「靴」——形聲文字で。かはくつの義である。音は「クワ」で、訓は「クツ」である。

「伏」——會意文字で、人に屈服して其の意を伺ひ、之に従ふ義である。轉じてフス・カクル等の義となつた。漢音は「フク」、吳音は「ブク」で、訓は「フス」等である。

「窓」——象形文字で、マドの形を象つたのである。音は「サウ」で、訓は「マド」である。
「射」——會意文字で、弓を引いて矢を放つ義である。漢音は「シャ」、吳音は「ジャ」で、訓は「イ
ル」等である。

「釣」——形聲文字で魚を釣にかけて取る義である。音は「テウ」で、訓は「ツル」等である。

「振」——形聲文字で、助け救ふ義である。轉じてフルと興す義となつた。音は「シン」で、訓は「
フル」である。

「滋」——形聲文字で、本義は川の名である。轉じてマス・シゲル・ソダツ等の義となつた。音は
「シ」、慣習音は「ジ」で、訓は「マス」・「シゲル」等である。

「縫」——會意形聲文字で、鍼で衣をぬふ義である。漢音は「ホウ」、吳音は「ブ」で、訓は「ヌフ」
等である。

二、語句

「世界のごく寒い國々の人」寒帯地方に住むエスキモー人を意味するのである。「着物は毛皮で」
着物は獸皮で作るが時としては鳥・又は海獸の腸を切り開いて、縫ひ合せて作ることがある、「頭
のてつべんから」頭のいたゞきから。「毛皮づくめの人」こゝでは、頭のてつべんから、足のつまさ
きまで、毛皮を以ておほうてゐるのをいふ。「テント」雨露をしのぐために張る天幕のこと。普通

はズツクで作るが、こゝのは獸皮で作つたものである。「そり」寒國で積雪の上を行くに用ひる一
種の乗物。「となかひ」偶蹄類中麋鹿神に屬する獸である。牝牡共に長大な角をもつて居る。寒帯
地方では缺くことの出来ない大切な動物である。「角や骨はいろくの道具になる」匙・小刀の柄
等をつくる。

讀み方の上に注意すべき語句

餘程 違つた 食物 獸 毛皮 頭 雪の中 一樣 地面 其の上 中に
は 角石 様 形 燈 船具 皮骨 代り 類 御ちそう

三、文章

本文章はエスキモー人の生活状態を内容にして面白く説いたのである。即ち第一節には
「世界のごく寒い國々の人は、我々とは餘程違つた珍しい生活をしてゐる。」

といつて、先づ讀者の心理をそゝり、それから彼等の食物について、また着物について面白く説
いてある。第二節には私共と餘程異つたテントの家・氷の家・穴の家等について面白く説き、第三・
四節には彼等の燈油を始め、食器・弓矢・釣竿・釣針・船具等に至るまで、悉く獸や魚の皮や骨など
で造ることが説いてある。第五節には彼等が乗つたり、また荷物を運んだりするのに車や馬車の
代りに橇を用ひること、及びそれ等をひかせるに犬や馴鹿を使役することについて説いてある。

最後の第六節には、彼等がそれが居なければ逆も生きて行くことが出来ないといふ天恵の一獣即ち馴鹿の活動振や役立つことについて面白く説いてある。私共は廣く渾圓球上に棲息する人類の生活状態を知るといふことは、たゞに愉快なことであるのみでなく、また私共の義務である。本文はかうした所に高貴な價値を有するのである。

區分

- 第一時 第一・二節(自九十一頁三行)を授く。
- 第二時 第三・四・五節(自九十三頁五行)を授く
- 第三時 第六節(自九十四頁八行)を授く。
- 第四時 總括的復習及び應用。

教具

本課の挿畫(エスキモー人・住家・馴鹿及橇に乗つて雪の廣野を走つて居るもの)を擴大した掛圖。其他エスキモー人の用ひて居る器具類等。

教法

第一時

▽第一・二節を授く。

- 一、目的を告げ、第一節を自由に誦讀させる。
- 二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませる。
- 四、内容につき問答する。

- 1、寒帶地方と居住民とにつき。
- 2、そこに住む人々の食物につき。
- 3、そこに住む人々の着物につき。
- 五、意味をよく意識しながら自由に二・三回讀ませる。

〔注意〕 第二節も右に準じて授く。

六、誦讀の練習。

指名して——また各人を自由に。

七、漢字等の書取。

- | | | | | | | | | |
|----|--------|----------|-------|---------|----|----|---|-------|
| 世界 | ごく寒い國 | 餘程違ふ | 珍しい生活 | 穀物 | 野菜 | 帽子 | 靴 | 家の造り方 |
| 屋根 | テントを張る | 茶わんを伏せた形 | 小さい窓 | 氷の家……等。 | | | | |

第二時

▽第三・四・五節を授く。

第一時に準じて授く。

第三時

▽第六節を授く。

第一時に準じて授く。

第四時

▽復習及び應用。

- 一、全文を自由に一・二回誦讀させる。
- 二、節を遂うて、彼等の質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、内容の要點につき問答して一層知得を一層明確にする。

食物につき——獸肉・魚肉……等。
 着物につき——獸皮・魚皮……等。
 住家につき——氷の家・テントの家・穴の家……等。
 食器や其の他の用具につき——獸骨・魚骨……等。
 儀を引く。
 食用に——肉・乳を。
 衣服に——皮や毛を。
 器具に——角や骨を。
 燃料に——ふんを。
 寒國人の生活

四、誦讀の練習。

指名して——各自自由に。

五、練習・應用。

(一)次の片假名を漢字に直させる。

ヨホドサムイ コクモツ ヤサイ パウシ クツ チャワンをフセたカタチ
 小さいマド トモシビ シヨクキ ジウをイる ツリバリ ツガフがよい
 ノをフリタテていく ジャウブン ギウニフ キモノをヌフイト……等。

(二)次の點線をうづめて纏つた文にさせる。

食物は……
 着物は……
 家は……
 道具は……

(2)とながいは鹿に似た獸で、寒い國の人はこれに……引かせる。大きな角を振立てて……

肉は……
 乳は……
 皮と毛は……
 角や骨は……
 ふんは……

〔注意〕 若し時間が足りなかつたら、「五」は家庭課題とする。
教授上の注意

- 一、本課はエスキモー人の生活を主として記述したのである。而して其の目的とする所は世界的見聞の擴張にある。故にその心で授けなければならぬ。
- 二、本課の内容については、深く立入つて説くことはいらぬ。本文に表はれてゐる程度に満足して感興を中心として取扱ふがよい。
- 三、併し兒童中讀書眼の鋭利なものがあつて、
「おもに獸や魚の肉で」――「獸」とは何獸か。「魚」とはどんな魚か。「おもに」であるから他に尚どんなものを……。
といふやうに質問するものがあつたら、答へてやるべきは言ふ迄もない。つまり本課の内容を徹底的に理解せよがための質問に對しては親切に答へてやる。
- 四、また内容を吟味するとき可成彼等をして其の要點をして其の要點を記憶させる。何となれば本課は興味中心といつても感じるのが主でなく知るのが主であるからである。
- 五、本課を授ける際、できるだけ、標本や繪畫等を示して、内容を具體化することを怠つてはならない。

第二十五 鎌倉權五郎

要旨

形式上では、難語句の意義、語法其他に關する知識を授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、鎌倉權五郎の剛勇に感激させ、傍ら私共祖先の生活の其の強い所を體驗させる。

教材

一、語句

「鎌倉權五郎景正」相模國の住人、鎌倉權頭景成の一子である。力量人にすぐれ、劍術・馬術・弓術も亦衆に聞えた剛の者であつた。詳細は備考部参照「或時の戰」後三年の役をいふ。「敵のはなちたる矢」「敵」とは清原武衡の家來鳥海彌三郎をいふ。「陣屋」軍隊の營所をいふ。「手負ひたり」負傷した。「こは何事ぞ」「こは」はこれに同じ。「聲を荒らげて」聲をはりあげて。但し怒氣をふくんだ聲である。「武士の常なり」武士の常態、即ち武士たるもの、當然であるの意。「げにもと思ひて」そのとほりだと思つて。「無禮をわび」無禮であつたことをあやまつて。

讀み方の上に注意すべき語句

家來	戰	射通す	相手	射殺す	陣屋	手負ひ	突立つ	刀	下より
けらい	たたかひ	いとおほ	あひて	いころ	ぢんや	ておひ	つきたつ	かたな	したより

此の度たび

三、文章

本文は我が國古武士の意氣を叙述したものである。敵のはなちたる矢、景正の右の目を射通したれば、景正大いにいかり、其のまゝ突進みて、相手を射殺したり。——普通のものなら氣絶するか死する所であるが、剛勇な權五郎はそんなことがないばかりでなく、怒心頭に燃えて其の儘進んで當の敵を射殺したと言ふに至つては、實に絶倫の勇者であるまいか。

「三浦平太郎爲次之を見て、急ぎ走り寄り、景正の顔をふまへて、其の矢をぬき取らんとす。」——いくら火急な場合だからとて、人の顔を草鞋掛の足で踏むなんかは随分粗忽な男であつたと見える。併し當時の武士は皆かうした荒い氣象だつた所に面白味があるまいか。

「景正ふしたるまゝにて刀をぬき、下より爲次を突かんとすれば、爲次大いに驚き、「こは何事ぞ」といふ。景正聲を荒らげて『矢にあたりて死するは武士の常なり。いかで生きながら顔をふましめんや』、と言へば、爲次げにも思ひて、無禮をわび、此の度はひざにて顔をおさへて、矢をぬき取れり。」——自分に好意を寄する人でも、尙武士の面目に關することあれば死を以て争はうとする所に我が國古武士の面影が躍如として現はれてゐる。實に本文は言々句々悉く古武士の意氣によつて躍動して居る。私共はかうした祖先の意氣に觸

れて、我が血肉に一種の躍動を覺えることを本當に愉快に思ふのである。本文はかうした意味に於て私共の好愛するもの一つである。

區分

第一時 全文を授く(形式上に重きを置いて)。

第二時 全文を授く(内容上に重きを置いて)。

教具

本書の挿繪を擴大した掛圖。

教法

第一時

▽全文を授く

- 一、目的を告げ、全文を自由に一讀させる。
- 二、質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませる。
- 四、内容につき問答する。
- 五、讀み方の練習。

指名して、また各人自由に。

第二時

▽全文を授く。

- 一、全文を自由に一回誦讀させる。
- 二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、内容につき問答。

教材の「文章」の部に記載しある所を参照し、古武士の壯勵な意氣にふれさせる。

四、誦讀の練習。

個人的に——また指名して。

五、次の文語を口語に直させる。

若武者ありき 射通したれば 射殺したり 矢をぬき取らんとす 突かんとすれば
 こは何事ぞ いかで生きながら顔をふましめんや 十六歳のことなりとぞ

教授上の注意

- 一、本課は兒童の血肉の中に、祖先の壯烈な活動の震動を傳へようとして選擇した文章である。だから其の考で取扱はなければならない。

二、本課は讀み替への文字一つあられども、どつちかといへば練習文に屬する。だから例の主義により、彼等自身の國語力によつて自學的に讀解させる。

三、併し練習文だからとて、全く兒童の讀解の儘にして、置くといふ譯でない。難語句等に對して指導の役目を盡すは言ふ迄もない。

四、本文は文語で記述してあるから、之を口語に譯する力の附與も忘れてはならない。

備考

鎌倉權五郎景正

鎌倉權五郎景正は、相模國の住人、鎌倉權頭景成が一子で、幼から力量人に優れ、馬術・弓術・劍術等何れも雙ない達人であり、又心は剛に、其の氣柔らかな若武者であつた。そして數度の合戦に加はつたが、何時も先驅して善く戦ひ、敵を斬る事多かつたが、自分は未だ一度も傷を受けたことがなかつたが、敵も味方も皆感心して居た。

堀川天皇の御宇、寛治元年奥羽の清原武衡が亂をした時、八幡太郎源義家に從つて出征したが、寛治三年金澤の棚の戦ひの時、景正は目覺しい戦をして其の勇武を全軍に稱えられたのである。

ここに、清原武衡が、一二と懇んでゐる上で、奥羽の住人島海彌三郎と云ふ者があつた。

この人、景正の戦鬨振りを眺めて、
 「心憎い小冠者の振舞ひが、未だ年も満たないのに、あの様な奮戦振りは、尋常の者ではあるまい。彼をこの儘にして置いたなら、多くの者が失はれやう、よしこの彌三郎が射殺してくれよう。」

かう考へて、景正の近づく度に、櫓に在つて其の機會を窺つて居たが、其の隙がなかつた。かくて、七月三日、彌三郎は諸卒を率ゐて櫓から討つて出た。ところが景正の叔父、鎌倉權太夫景道に出合ひ、互に追ひ

つ追はれ、奮戦したが、この時、景正もこの陣に在つて、例の如く數多の兵を斬つて敵を四方に駆散して傍に退き、太刀を鞘に納めて、さて丸木の弓を執つて敵を射ようと準備したのであつた。

この時、遙にこれを望んだ彌三郎は、これ天の與へと喜び、早速弓を番へて引絞り、これを射ました。すると矢は矢所を違へず、景正の右の眼を射て頭を貫き、簇は甲の鉢付の板を射たのであつた。

これが普通の者だつたら、一堪りもなく打倒れてしまふのであつたが、景正は少しも驚かず、片眼で敵を睨みながら、只今、御矢を賜つたは、鳥海彌三郎とこそ覺える。其處引き給ふな景正が矢を進ませませうから。うけて見給へ、と彌三郎を射返した。

彌三郎は、此の有様を眺めて、自分の矢を受けた程の者は、誰一人として、倒れない者が無いのに、頭を射貫れながら、倒れるどころか却つて富方を射やうとしたので、流石豪勇の彌三郎も、恐ろしくなつて、逸速く逃げかけたので、景正の矢はうまく外れたけれど、亂札、逆茂木などの中を逃げる事として、直ぐ景正に近づかれて其の首を斬られた。

かくて景正は當の敵彌三郎の首を取つたので、味方の陣に引返しまして、

「景正手負ひした、此の矢を抜いてくれ。」

と呼んで仰向けに倒れたから、同じ相模の住人で、景正と親しい友である、三浦平太郎爲次が、矢を抜かうとした。

ところが、深く立つた矢の事として、却々に抜けませんので、土足の儘で景正の顔を踏んで、矢を抜かうとすると、景正は倒れながら刀を抜いて、爲次を斬らうとした。爲次は餘りの事に驚いて、

「これはどうするのや。」

と尋ねますと、景正は、

矢弓に中つて死ぬのは、武士の期する所だけれども生きて居りながら、足で面を踏まれれば、武士として忍ぶ事が出来ない。それ故、先づ汝を斬つて、我も死なうとするのだ。」

と言つた。爲次は一言もなく、その粗忽を謝して、膝を屈して面を押へ、そしてその矢を抜きとつた。

第二十六 虎と猫

要旨

この時、景正は僅かに十六歳であつたが、この事忽ち軍中に傳つて、皆その勇武に舌を巻かない者はなかつたといふ。因に記す。本文の原據は奥州後三年記にある。

教材

一、文字

「猫」——會意形聲文字で、ネコのことである。漢音は「ベウ」吳音は「メウ」で、訓は「ネコ」である。

「虎」——會意文字で、トラのことである。漢音は「コ」、吳音は「ク」で、訓は「トラ」である。

「曲」——象形文字で、物を容れる器のまがつてゐる形を象つたのである。後轉じて都辟・委細、

音樂の調節等の義ともなつた。漢音は「キョク」、吳音は「コク」で、訓は「マガル」・「マグ」・「カガム」等である。

「牙」——形象文字で、上下のキバの相錯る貌を象つたのである。漢音は「ガ」、吳音は「ゲ」で、訓は「キバ」である。

「適」——形聲文字で、行き到る義で出る。漢音は「セキ」、吳音は「シヤク」で慣習音は「テキ」で、訓は「ユク」・「シタガフ」・「カナフ」・「タマ〜」等である。

「靜」——形聲文字で、本義は丹青の色の鮮明なるをいふ。漢音は「セイ」、吳音は「ジャウ」で、訓は「シヅカ」・「シヅマル」等である。

二、語句

「猫デナイシヨウコニ竹ヲカイテオキ」これは拙い畫工のかいた虎を冷評した川柳である。一首の意は「下手な畫工は虎のつもりでかいた畫でも、他人は之を猫としか見ないから、これは猫ではない虎だといふことを知らせるために、虎につき物の竹をかきそへて胡麻化して置け」と皮肉つたのである。併しこゝに引用したのは虎と猫とはその形がよく似てゐるといふことをいふために引用したものである。

「一撃」ひとつち。「トゲ」猫や虎の舌の面に生てゐる針の如き乳頭突起をいふ。之を通俗的に

刺トゲといつたのである。「ヒトミ」眼球のうちの黒き部分即ち瞳孔をいふ。「三毛」白・黒・褐の三色相雜れるのをいふ。

讀み方の上に注意すべき語句

獸 <small>けもの</small>	他ノ獸類 <small>たのじゅうるい</small>	前足 <small>まへあし</small>	一撃 <small>いちげき</small>	上下 <small>じやうげ</small>	内方 <small>ないほう</small>	ヨヂ上 <small>よぢのうへ</small>	ルコトヲ得 <small>ることをうか</small>	此ノ外 <small>このほか</small>	圓シ <small>まる</small>
日中 <small>ひちゆう</small>	毛色 <small>けいしき</small>	一樣 <small>いちやう</small>	黒・白 <small>くろ・しろ</small>	三毛 <small>みつげ</small>	猫ノ中 <small>ねこのうち</small>				

三、文章

本文は猫と虎とはその形態に於て頗る相類似してゐることを對照して面白く説明したのである。先づ第一節に「猫デナイシヨウコニ竹ヲカイテオキ」といふ川柳を引用して總叙としたことは一寸奇抜で面白い。それから分説に入つて第二節には顎と首とを捉へて、

顎が短い——故にかむ力強い。
猫も虎も 首が太い——故に運ぶに便利。

だといふことを比較的述べて、第三節には足とそれの爪とを捉へて、

足が太い——故に力が強い。
猫も虎も 鋭き曲れる爪をもち
用なきときはかくし、
用あるときに現はす。

といふことを比較的に述べ、第四節には牙と舌とを捉へて

猫も虎も

鋭き牙をもち——肉をさくに適す。
舌に刺があつて——肉を取るに便利。

だといふことを比較的に述べ、第五節には

猫も虎も

木によくよぢ上ることができぬ。
足裏が柔かであるから音を立てないで他の動物に近づく。

といふことを述べ、第六節には其の他鼻も耳も尾も鬚も皆よく似てゐるが唯

目に於て

虎の瞳は常に圓いが、
猫のは日の中は細い。

色に於て

虎は一樣であるが、
猫には黒・白・三毛などある。

といふ風にその違つてゐる點について述べたのである。

二つの物を比較した新しい試みの記述法の下に本當に面白く出来て居る。

区分

第一時 第一・二・三節(自九十八頁六行)を授く。

第二時 第四・五・六節(自百頁二行)を授く。

第三時 復習及び應用。

教具

猫・虎の標本・型又は掛圖等。

教法

第一時

▽第一・二・三節を授く。

- 一、目的を告げ、各自をして自由に一讀させる。
- 二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、讀方を檢閲し、各自をして自由に一・二・三回讀ませる。
- 四、内容吟味。
 - 1、川柳の意義につき。
 - 2、二者に於ける頸と首との對照。及びそれと生活との關係の對照につき。
- 五、指名して二・三名讀ませる。

〔注意〕 第二・三節も右に準じて授ける。

六、読み方の練習

指名して——また各人自由に。

七、漢字の書取。

猫。 虎。 曲。 レル爪 一撃 鹿 鋭イ爪 ヨク似タル獸ナリ……等。

第二時

▽第三・四・五節を授く。

第一時に準じて授く。但し書取らせる漢字は次の如し。

牙。 適。 ス 静。 カニ歩ム 飛附ク 鼻 耳 尾 三毛猫 虎猫……等。

第三時

▽全文の復習及び應用。

一、全文を自由に一讀させ、次に、節を逐うて質問に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

二、内容につき問答。

教材の「文章」の部を参照し、類似の點、異なる點につき問答して、二者の異同を明かに意識させると共に、之を基礎として他を讀み、他を解せんとする研究的精神をも啓發する。

三、各自をしてよく内容を意識しながら自由に一・二回誦讀させる。

四、練習應用。

(一) 次の點線をうづめ纏つた文にさせる。

- (1) 猫のあごは……。 虎のあごも……。 あごが短ければ……。
- (2) 猫の首は……。 虎の首も……。 首が太ければ……。
- (3) 猫には二本の鋭い牙があつて……。 又舌には……があつて、……。 虎も……。

〔注意〕 右にならつて其の他の場合のものをも出す。

(二) 次の文語を口語に直させる。

首太ケレバ 猫ノネズミヲ捕フルガ如シ 音ヲ立テズシテ 一様ナルニ 虎ニ似タルモノアリ……等。

五、補説

二者に於ける

- 1、棲息地の相違につき。
- 2、性質上の相違につき。

〔注意〕 若し時間が足りなかつたら、「四」は家庭課題とするか。又は更に一時を割いて課する。教授上の注意

一、本課の内容を吟味するとき、標本又は掛圖等を示して、よく観察・對比させることを怠つてはならない。

二、本課には二者につき、尙

1、棲息して居る場所の相違につき、

2、性質上の相違について、

は記述してないから、適當な機會に之を補説することも必要である。

三、本課の内容を識得したら、かうした理解の下に其の他の動物の形態と生活との關係についても考察して見ようといふ所謂研究的態度を誘起することも賢い取扱で且つ兒童の創造生活を甚だ幸福にすると思ふ。

四、本文に於ける記述法は新しい試みに屬するものであるから、特に一時を割いて構想上につき批判し、彼等の表現上に新暗示を與へることも無用でなからう。

五、本文は文語で記述してあるから、口語に譯する力を附與することも忘れてはならない。

備考

虎

肉食類の一種で獅子・熊等と同屬にして、アジア大陸に限りて産し、殊に印度に多く、北は支那・朝鮮・シベリアに至るまでこれを見る。虎に數種ある如く云ふは誤なり。尤も北方産のものは南方産に比し、被毛密に且柔かなりと雖ども、これを以て別種となすに足らず。獅子と共に猛獸中の猛なるものにして、大き略々相同じ。鼻端より尾端に至るまで殆んど十尺に達するものあり。尾は細長く略々軀幹と同長なり。體色は黄色乃至黄茶色にして黒色横帯を示し、いはゆる「トラふし」なり。尾は許多、黒色環を示し、喉及胸腹は純白なり。毛色美しきを以て、皮は數物として甚だ珍重せらる。日中は荊棘中に眠り、夜間出てて食を求むるを常とす。よく樹木を攀ち、又游泳するを得。力極めて強く、一撃能く牛馬を斃し、饑に迫るときは人をも襲ふ。

猫

肉食類中猫族に屬する獸。頭は圓く、胴は細長く、尾また長し。體は全面に柔毛を密生す。今日の飼猫はもとエジプト産野猫より出て、漸次各地に廣がり、更に其の他の野猫と混血して、各地固有の猫を生じたるものなりと稱せらる。今日世界に在る飼猫の種類は約九種を算す。元來猫は熱帶の動物なるが故に、暖氣を好み、暗所に活動す。よく渴を忍び、又空氣の稀薄なるにも耐ふ。其の壽命は概ね十二年にして、一ヶ年内に仔を生むこと、温帯にては、普通二回、熱帯にては三回なり。猫は生後十箇月にして成熟す。生殖力は一歳より九歳までにして、一回に平均三乃至六匹の仔を生む。受胎期間は八週間にして、哺乳期また七八週に亘る。捕鼠用及玩弄物として人家に飼はる。我國にては到る所に見られ、殊に養蠶地方にては鼠害を除くため、特に良種を選択して最も多く猫を飼ふ。飼猫は鼠を除くを以てベスト豫防上にも亦頗る有用なり。(以上日本百科大辭典に據る)

第二十七 虎 狩

要旨

形式上では新文字の讀み方、書き方、難語句の意義、語法其の他につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、虎狩に於ける勇壯な境地を感味させ、讀者の血肉を躍動させるを以て要旨とする。

教材

一、文字

「畜」——會意文字で、本義は農作によつて、多くの收穫をうる、それを積み貯へる義である。轉じて家に養ふ雞・豚等即ち家畜の義となつた。音は「チク」で、訓は「タクハフ」・「ヤシナフ」等である。

「危」——會意文字で不安の義である。吳音は「ギ」。慣習音は「キ」で、訓は「アヤフシ」等である。

「險」——形聲文字で、けはしく危きの義である。音は「ケン」で、訓は「ケハシ」である。

「談」——形聲文字で、語り話す義である。漢音は「タン」、吳音は「ダン」で、訓は「カタル」等である。

「境」——會意形聲文字で、國の竟れる端即ちサカヒの義である。漢音は「ケイ」、吳音は「キヤウ」

で、訓は「サカヒ」である。

「奮」——會意文字で、鳥が翼を張つて原野に飛揚する義である。轉じて人のふるひ起つ義になつた。音は「フン」で、訓「フルフ」である。

「揮」——形聲文字で、振り動かす義である。音は「キ」、訓は「フルフ」等である。

「令」——會意文字で、上に立つ人が下の者に命令し、戒告する義である。轉じて長官の義となり、また命令に服従する義となつた。漢音は「レイ」、吳音は「リヤウ」で、訓は「イヒツケ」等である。

「領」——形聲文字で、ウナジの義である。轉じて衣服の頭を圍む所即ちエリの義とし、又令の義をとつて、ヲサ・カシラ・スブ・ヲサム等の義となつた。漢音は「レイ」、吳音は「リヤウ」で、訓は「ウナジ」・「エリ」・「ヲサム」である。

「胸」——會意形聲文字である。漢音は「キョウ」、吳音は「ク」で、訓は「ムネ」である。

「傷」——形聲文字で、キズツク義である。轉じてイタム・ウレフ・ナゲク・ナヤム・ソコナフ等の義となる。音は「シヤウ」で、訓は「ソコナフ」・「イタム」・「キズツク」・「キズ」等である。

二、語句

「南の方の熱い國」馬來半島を意味するのである。「仕立ててゐる」ゴム樹栽培の意。「ぶた」野猪の

變種で、形は野猪に似て居る。體軀肥滿して太く、頭脚比較的ひかくてきに小さく、尾が短い。常に身體を冷さうがために、汚泥の中に展轉する特性がある。肉は滋養にとみ、食用に供する。「虎狩」虎を退治すること。「勇氣百倍して」勇氣が益々加つたといふ意味を誇大してかくいつたのである。「全員」全體の人々をいふ。「指揮官」こゝではさしづする人(吉井信照か)をいふのである。「敵の領分が次第々々にせまくなる」敵は虎をさす。一句の意味は「虎のゐる所がだん／＼に狭くなつて来る。即ち一歩々々虎に近く。」といふ意である。「浴びせかくる」こゝでは一齊にうつ銃丸が虎に雨注するをいふ。

讀み方の上に注意すべき語句

南の方	日本人	方々	出て来て	度々	さらつて行く	夜明方	大木	山の
中	足跡	かくれて居る	生茂る	草の中	林の中	林の外	出る	一歩々々
虎の方	木だま	銃聲	人丈	大波	木に上つた	一聲	おどり上る	木から
下りて	後足	重傷	立上る	大虎	はね上つた後に	内外		

三、文章

本文は馬來半島に居住する我が同胞が、實際に試みたといふ事實に基いて叙述したのである。「ゴム園の一つに虎が出て来て、度々家畜などをさらつて行くので、人々は皆困つてゐた。」――

人々はただに困るだけでなく、所謂人心恟々たりといふ所である。

或日の夜明方に、ふとつた犬がしきりに鳴きさわぐので、みんなが起きて見ると、大きな虎がぶたをくはへて、すぐそばの林へ逃げこむところであつた。「――豚や犬のけたゝましい吠え聲に人々は何か變事を豫想して出て見ると、驚くべし！ 大きな虎が豚をくはへて逃げ行く所であつた。おのれつ、につくき奴！ とかう叫んだときに、虎狩の計畫が暗黙の裏に成立したのである。

「虎がどこにかくれてゐるかわからないのに、生茂つた木や草の中を進むのは、きはめて危険な仕事であるが、人々は勇氣を奮つて、とう／＼境目を横ぎつた。」――何かかう一種の不安におびやかされながら勇氣を鼓して進んだのである。

虎の足跡が見えないので、まだ確に林の中に居ることがわかつた。一同は勇氣百倍して、いよいよ攻撃に着手することになつた。「――勇氣百倍！ 全くである。これからいよいよ勇壯な活動が始まらうといふ。その第一の開幕である。

「全員一列に境目の所に並んで、手に／＼武器をかまへ、指揮官の命令にしたがつて、一歩々々虎のゐる方へおし寄せて行く。」――何と壯快ぢやないか。

「やがて向ふの草木がざわ／＼と動いて、太い／＼なり聲が聞える。一同は息を張りつめて指揮官

のさしづを待つ。——いよ／＼敵の所在が分つた。愉快々々！ 併し敵はさるもの、油断は出来ない。一同は目を光らし息をつめて指揮官の命令を待つてゐる所である。

「聲をねらへ。打て。」——驚天動地の活動の展開！

「木だまにひびく銃聲、天地もふるふばかりの虎のさけび。人丈よりも高い草むらが大波の様に動いて、鏡の如き目が其の間からきらりと光る。虎はすきをねらつて今にも飛びかゝらうとしてゐるらしい。」——天地に響く銃聲。恐しき猛獸の咆哮。爛々たる眼の光。猛り狂ふ草むらの大波瀾。今にも飛びかゝらうとする勢！ 壯絶！ 快絶！ 凄絶！ 恐怖等すべてが茲にあつまつてゐる。

「木の上から指揮官が一發打つた。うまく顔に命中した。」——愉快！

「虎は一聲高くうなつて、をどり上る。すかさず右の胸にまた一發。」

「續いて人々が一せいにたまを浴びせかける。虎は苦しきぎれに草の中をぐるひ廻る。」——愉快愉快！ 併し百獸の王とも言ふべき猛虎の死にも狂ひは物凄くあつたであらう。

「しばらくして一同は木から下りて、虎に近附いた。……もう立上る力も無い。それでも人が近寄つたら飛附かうとしてゐる。……さらに一發……さすがの大虎も二三度はね上つた後に大地にどつと倒れた。」——猛虎の終焉！ 實に痛快でもあるが、また哀れでもある。併し歡喜

の聲は森林の内外に響いたことであらう。

以上の諸點は特に感味させたい。

區分

第一時 全文の通讀。

第二時 第一・二節(自百一頁七行)を授く。

第三時 第三節(自百四頁二行)を授く。

第四時 第四・五節(自百六頁五行)を授く。

第五時 全文の復習及び應用。

教具

本課の内容を繪にした掛圖。

教法

第一時

▽全文の通讀。

一、目的を告げ、全文を自由に一讀させる。

二、各節につき

質疑に答へ——読み方の誤りを正し——自由に一讀させる——内容につき問答する。

三、読み方の練習。

指名して——また各人自由に。

第二時

▽第一・二節を授く。

一、第一節を自由に一回讀ませせる。

二、質疑に答へ、また主要の語句・語法等につき問答する。

三、各自をして自由に一・二回讀ませせる。

四、内容につき問答する。

教材の「文章」の部に記する所を参照して。

五、内容を意識しながら自由に二・三回讀ませせる。

〔注意〕 第二節も第一節に準じて授く。

六、読み方の練習。

指名して——また各人の自由に。

七、漢字等の書取。

熱い國 ゴム園 家畜。 危險。 相談 虎狩 山續き 山と林との境 危險な

仕事 勇氣を奮つて 足跡 攻撃に着手……等。

第三時

▽第三節を授く。

第一時に準じて授く。但し書取るべき漢字等は次の如くである。

心配 全員一列 境目の所 武器 指揮官の命令 敵の領分 太いうなり聲

銃聲 天地にふるふばかり 飛びかゝらうとしてゐる……等。

第四時

▽第四・五節を授く。

第一時に準じて授く。但し書取るべき漢字等は次の如くである。

一發打つた 顔に命中 右の胸 後足 重傷を受く 近寄る 大地にとつと倒れ

た 喜の聲……等。

第五時

▽全文の復習及び應用。

一、各自をして自由に一回誦讀させる。

二、質疑に應答する。

三、内容につき問答する。

- 1、ゴム園に時々虎がやつて来る。人々が困つて居る、或日のこと大虎が来てぶたをくはへて逃げていつたことは、本のどこにどういふ風にかいてあるか。
- 2、ゴム園の人々は相談して虎狩を始めることにしたこと。山と森林との境に虎の足跡をしらべたこと。虎が林の中に居ることを認め、一同は勇氣百倍して攻撃に着手したこと等は、本のどこにどうかいてあるか。
- 3、全員が一行になつて進んだ、だん／＼敵に近づいた、深い草が動く、太いうなりが聞える、一同は緊張して指揮官の命令をまつてゐることは。
- 4、聲をれらつて打つた。天地に轟く銃聲、猛虎の咆哮、草叢の大波瀾、翻々として光る猛虎の眼光、塵をれらつて飛びかゝらうとする猛虎の勢等、さうした勇しい凄しい有様は、
- 5、木の上から一發、顔に命中。また一發、右の胸に、命中。續いて彈丸を浴びせかけた、虎は苦しきまぎれに狂ひまはる光景は。
- 6、一同は木から下りて虎に近附いた。虎は重傷を負うてゐる。併し危険、また一發、さすがの大虎も二三度はね上つた後に大地にとつと倒れたといふ痛快な光景は。

四、各自をして内容を意識しながら一・二回自由に讀ませせる。

五、話方の修練。

指名して話さしめ、話すことの修練を行ふ。

教授上の注意

- 一、本課は感興を中心生命とした教材であるからその積りで授ける。南洋の地理につき云々と云ふ考はもたなくてよい。
- 二、教材の区分は本文の本質上部分法によるのは面白くないが併し止むを得ない。それで第一限は一讀過させて漠然ではあるが全生命にふれさせ、第二時から部分的に取扱ふことにしたらよい。
- 三、本課は話方の材料として恰好のものであるから、最後に話方の修練を行ふことにしたらよい。
- 四、本課に於ける内容の詳細は吉井信照氏著の「馬來半島に於ける余の猛獸狩」を参考したらよい。本文はそれからとつたのである。

第二十八 革

要旨

形式上では、新文字の讀み方、書き方、難語句の意義語法其他につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では革の種類・品質及び其の用途につき知らしめ、傍ら工業思想の養成に資するを以て要旨とする。

教材

一、文字

「革」——會意文字で、獸の體から剝取つた儘のを皮といひ、其の毛を取り去つたのを革といふ。漢音は「カク」、吳音は「キヤイ」で、訓は「カハ」。「アラタム」等である。

「袋」——形聲文字で囊に屬す。包む義から衣をかく。漢音は「タイ」、吳音は「タイ」で、訓は「フクロ」である。

「隊」——形聲文字で、本義は高い所からおちる義である。後轉じて陣の義となつた。漢音は「タイ」、吳音は「デ」で、訓は「クミ」等である。

「掛」——形聲文字で、卜筮の時、箸を小指の間にかけ置く義である。我が國では「カケ」と訓じ、金錢の授受を後日にして物品を賣買すること。又カケネの略、ウチカケの略である。其の他カカリと訓じ、勤務の受持の意、租税賦課等の義もある。漢音は「クワイ」、吳音は「ケ」で、訓は「カク」等である。

「要」——形聲文字で、腰に兩手をあてた貌である。腰は人體の中央で、體を支持する大切な所である。これからして、要處・要約・必要・主要等の義が生じた。音は「エウ」で、訓は「モトム」。「カナメ」等である。

「球」——形聲文字で、玉で作つた磬である。後轉じて圓形の義となつた。漢音は「キウ」、吳音は「グ」で、訓は「タマ」である。

「羊」——象形文字で、羊の角と四足と尾とを示してゐるのである。音は「ヤウ」で、訓は「ヒツジ」である。

「豚」——會意文字である。古くは肉と豕と又(手)の合字であつた。著し又(手)に豕の肉をとつて神に獻する義がある。漢音は「トン」、吳音は「ドン」で、訓は「ブタ」である。

「劣」——會意文字で、力少く弱き義である。漢音は「レツ」、吳音は「レチ」で、訓は「オトル」である。

「達」——形聲文字で、往いて相遇はざる程廣い九達の大略である。轉じてトホル・トドク・貫く・物事に通曉せる人等の義となつた。漢音は「タツ」、吳音は「ダチ」で、訓は「トホル」・「トドク」等である。和義には「タツシ」・「ダチ」・「タケ」・「ドケ」の訓みがある。

二、語句

「革」備考部參照。「軍隊」陸軍・海軍をまるめていふ。「身ノ廻リノ物」身につけるもの意味。「ハイナウ」革でつくつた小さき箱で、背に負ふもの(ラシドセル)。「彈藥カフ」彈藥を入れる箱。「タツナ」馬のくつわにつけた綱で、乗つた人がこれを手にとつて馬を御するのである。「砲車」大

砲をのせた車。「シチヨウ車」彈藥・糧食・被服其の他の諸材料をのせる車。「シラヘ革」機械の車輪の周圍にまとうて、車輛を廻轉させる帶革をいふ。「野球ニ使フ道具」ボール・ミット等をいふ。「ツバミ」櫻の木で造り、中部をくびりて内の空なる胴の兩端に、猴の革を圓く張り、調べの緒をかけた一種の樂器。大小二種ある。

讀み方の上に注意すべき語句

- 草カサ 錢入ゼンニレ 煙草入エンサウ 身ノ廻リミノマワリ 帶革オビカハ 彈藥タンヤク ガフ 銃ノ負革ジュウノオビカハ 劔ケン 馬具ウマギ
- 工場コウバ 革ノ中カサノナカ

三、文章

本文は其の用途が日に／＼擴張し、工業上缺くことのできない革について記述したのである。内容の大體は次のやうになつて居る。

- 第一節 革と日用品(錢入・煙草入・下駄の緒・靴等)
- 第二節 革と軍隊(背囊・帶革・彈藥盒・負帶・鈎帶・馬具等)
- 第三節 革と軍隊(車の引綱・おほひ等)
- 第四節 革と工場(調革等)
- 第五節 革と運動具其他(野球の用具・太鼓・鼓・三味線等)

牛——靴・カバン・袋物等

第六節 革の種類と用具 羊・山羊——手袋・表紙・靴等。

馬・豚——(手ノ革ノ代表ニ使フ)

第七節 革と製造業(段々に發達)

革はゴム業の發達と共に近來は著しく發達し、近代的工業思想を養ふ大切な教材である。

區分

- 第一時 第一・二節(自百七頁終行)を授く。
- 第二時 第三・四節(自百九頁終行)を授く。
- 第三時 第五・六・七節(自百十頁終行)を授く。
- 第四時 全文の復習及び應用。

教具

本課の中にあらはれて居る革製の用具。

教法

第一時

▽第一・二節を授く。

一、目的を告げ、自由に一讀させる(第一節)

二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませる。

四、内容につき問答。

要點を確實に捕捉させる。

五、指名して二・三名に讀ませる。

〔注意〕 第二節も第一節に準じて授く。

六、誦讀の練習。

指名して、また各人に自由に。

七、漢字等の書取。

砲車 革ノオホヒ 戦争 工場 車に掛ッテキルシラベ革 必要……等。

草 錢入 煙草入 袋物 靴 軍隊 帶革 彈藥ガフ ハイナウ 劔ノツ

第二時

▽第三・四節を授く。

第一時に準じて授く。但し書取らせる漢字等は次の如くである。

砲車 革ノオホヒ 戦争 工場 車に掛ッテキルシラベ革 必要……等。

第三時

▽第五・六・七節を授く。

第一時に準じて授く。但し書取るべき漢字等は次の如くである。

野球 道具 樂器 材料 羊 手袋 表紙 豚ノ革 品が劣ル 革ノ製造

業 段々ニ發達スル……等。

第四時

▽全文の復習及び應用。

一、全文を自由に一讀させる。次に質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

二、内容につき問答する。

此の際革の種類につき、また用途につき其の要點を明確に捕捉するやう努める。

三、誦讀の練習。

自由に——また指名して。

四、次の點線をうづめて纏つた文にさせる。

(1) 革ニハ牛ノ革、……等ガアル。牛ノ革ハ……ナドヲツクルニ用ヒ、羊ヤ山羊ノ革

ハ……：ナドヲツクルニ用ヒル。豚ヤ馬ノ革ハ……：廣ク使用サレル。

(2) 軍隊デ用ヒル……：ナドハ皆革デ造ツタノデアル。

(3) 私共ノ日常使ツテキル……：ナドハ皆革デ造ツタモノデアル。

(4) 工場ノ車ニ用ヒル……：ハイフマデモナク革デアル。

〔注意〕 若し時間が足りなかつたら「四」は家庭課題とする。

教授上の注意

- 一、本課は前にも言つたやうに、革業はゴム業と共に我が國工業上有望の地位を占めてゐるから、之に關する思想を興へることは國民教育上必要なことである。従つて取扱ふ上に於てもさうした考を以て臨まなければならない。
- 二、本課はどつちかといへば知的材料である。従つて知るといふことが大切な要求である。だから内容吟味の際、要點の記憶といふことに注意を拂はなければならない。
- 三、本課の中に表はれてゐる製作品中、兒童のまだ實見せないものもあらうから、それ等のものは可成實物又は繪畫等を用意して直觀させるがよい。
- 四、讀本教授の目的は單に内容の習得のみでなく、形式上の習得も大切な一面であるから、此の方面の練習上に力を用ひることも怠つてはならない。

備考

革

獸より剥取りたるまゝの皮は、腐敗し易きのみならず、水分の去るに隨ひ、次第に硬く、且つ脆くなりて破れ易し。これを柔軟にして、強き性質を失はしめずして、腐敗せざる實用のものに變ぜしむる方法を鞣皮術といひ、其の製品を革といふ。

種類——製法・産地・用途等の異なるに隨ひ、油革・クロム革・白革・露西亞革・佛蘭西革・モロッコ革・底革・甲革等種々名稱を異にすれどもいづれも便宜上の區分たるに過ぎず。

原料——本邦當業者の用ふる原料は、内地産の外、支那・印度・佛蘭西・和蘭及び米國等より輸入したるものにて、多くは乾燥し、若くは鹽漬として、腐敗を止めたるものなり。最近の調査によるに、其の輸入額、牛皮のみにて年七十萬以上の多きに達すといふ。品位・形状・共に和牛皮に比して良好なり。

鞣皮法——製革者の購入する原料は、乾皮・鹽漬皮にして生皮を用ふるは稀なるを以て、まづ水に浸して柔軟ならしむると共に、これに附著せる汚血及び鹽分等を去る必要ある其の時間は、もとより皮の種類と水の温度とによりて一様ならざれど、適度に柔軟なるに至らば、灣形の小刀にて、内面に附著せる肉、脂肪等を削去り、此等は膠の原料となし、皮は水洗したる後毛脱毛法を施す。これには、鹼作用に依り、毛根と真皮とを分離せしむる法と、石灰水に浸して脱毛せしむる法とあり。石灰水を用ふる時は、皮中の脂肪を鹼化せしめて、去り易からしむるのみならず、皮の纖維を擴げ、厚さを増し、單寧の吸收量増すを以つて、尤も普通に行はる。小獸の皮、竝に羊皮等の薄皮口には、消石灰、若しくはこれに硫酸曹達を加へたるものを塗りたるまゝ、積重ね、後、鈍刀を以て削りて脱毛せしめ、毛は肥料となし、皮は水洗して鳥糞の融液に浸す。これ主として、石灰を去る目的なれど、纖維を膨脹し、鞣皮の際、單寧の吸收を容易ならしむる効あるを以て、鹼法によりて、脱毛したるものにも適用す。殊に近來は、糖又は糖皮の廢液(染料に用ひたる絞汁)等を用ふ。以上の手續を経たる皮は、古來鞣皮等のごとき含單寧物質の水液中に浸して、鞣皮の事を行ひしが、かくては、厚皮にありては、一年有餘の歳月を要するを以つて、近來

電氣又はX放線等を用ひて、鞣皮するを利なりとするものあり。又原料の種類によりては、明礬・鐵鹽類及びクロム鹽類の礦物質、若しくは肝油・鯨油等の如き動物質油を用ひて、鞣すことあり、殊にクロム法は、近來大いに賞用せらるるに至れり。今日一般に用ふる革は、多く單寧を用ひたるものなれど、下駄の緒、裏皮等の如き白革は、明礬の如き礦物質、また手袋、時計の包革の如く黄色なるは、油類にて鞣したるなり。されど毛皮の鞣方は、毛を保存する要あるを以て別の法を用ひざるべからず。仕上法——使用の目的により多少異なれど、多くは打ち又は削りて一様の厚さとし、種々の染色を施したる後、磨きて光澤を具ふ。本邦固有の意匠により、染出したる更紗模様等は、優美にして、海外への輸出も少なからずといふ。

用途——革は柔靱にして強く、且つ種々の模様を染出し得るを以つて、其の用途頗る廣く、靴・鞆・座蒲團・馬具・器械の調革、軍人の背囊、其の他の軍用品、書籍の表紙・手袋・下駄の緒、藁口・煙草入等、吾人日用品の多くは、一部若しくは全部を此の革を用ひざるもの少なし。

由来——太古草昧の世にありては、人民常に漁獵を事とし、其の肉を食ひ、其の皮を着て生活せしより考ふるに、製革の業は、自然の境遇上、先此の時代に其れを發芽せしものならん。かの羊皮紙ペーパーを記録に用ひしが如き、亦以て其の起原の古きを想像するに足らん。かく起原の古きに拘はらず、各國共に此の業を賤しめしかば、其の發達は他の工業に比して遅々たりしが今や漸次發達の傾向を現はし、歐米は勿論本邦にても、東京・大阪等にありては、器械力を應用し、化學の原理に基づき、盛んに製造に従事し、年産額約三百萬圓以上の多きに達せり。されどなほ輸入するもの、數十萬圓にして、年々僅に減少するのみ。以上の産地は東京・大阪・兵庫・廣島にして、これに亞ぐを三重・和歌山・熊本・奈良・高知・福岡・山形・長崎・新潟・石川・鹿兒島・青森等とし、全国各地にも、亦多少の産出あり。(日本家庭百科字彙に據る)

第二十九 おのぶさん

要旨

形式上では新文字の讀み方・書き方・難語句の意義、語法其他につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、模範的一少女の言動を通じて深く自己を反省し、自己もそのやうに常に道徳的生活を營まうとする意志を起させるを以つてその要旨とする。内容上では、模範的一少女の言動を深く感味させ傍ら自己の生活を反省して善的生活を營まんとする努力的意志を鼓舞する。

教材

一、文字

「授」——會意形聲文字で、與へる義である。漢音は「シウ」、吳音は「ジュ」で、訓は「サヅク」である。

「算」——會意文字で、竹と具との合字である。竹はソロバン、具は兩手に寶をもつ義、合せて人がソロバンを以て計算する義である。音は「サン」で、訓は「カゾフ」等である。

「術」——形聲文字で、邑中の逆の義である。轉じて人の由る所、方法・事業・學問・技藝等の義となつた。漢音は「シユツ」、吳音は「ジュツ」、慣習音は「ジュツ」で、訓は「ワザ」・「ハカリゴト」等である。

「題」——形聲文字で、ヒタヒの義である。轉じてカシラ・物の表標・書籍の名號、卷頭の文字、

の義となつた。漢音は「テイ」、吳音は「ダイ」で、訓は「ヒタヒ」等である。

「帳」——形聲文字でトバリの義である。音は「チャウ」で、訓は「トバリ」である。

二、語句

「私の級の級長」自分等の學級に於ての級長。「残念に思つて」こゝではくやくしく思つての意。「筆記帳」読み方や算術や綴方などを學習する時使用するべき帳面をいふ。

読み方の上に注意すべき語句

十分前

毎朝

前には

下手

正しく

結ぶ

悪口

度々

三、文章

本文は言ふ迄もなく模範的一兒童を描いて、不知不識の間に善き感化を與へようといふ考から叙述された文章である。

文の組立は一少女が自分と最も仲の善い一少女即ちおのぶさんの學校や家庭に於ける言動を感動的に敘述したことになつて居る。左に簡短に道德的批判を試みて見よう。

「おのぶさんは私の級の級長で、私とは仲のよいお友達です。」——級長！此の一語でもう此の子の人格的總價が分かる。

「學校へ行くのに、きつと私をさそつてくれます。」——信義の厚い子であることがわかる。

「おのぶさんがうちへ寄つてくれる時間は、きちんときまつてゐて、學校にはいつでも授業の始る十分前ぐらゐに着ます。」——時間の確守即ち規律正しい子であることがわかる。

「私には朝ねをするくせが有つたのですが、おのぶさんが毎朝寄つてくれるやうになつてから、それがすつかりなほりました。」——おのぶさんによつて自分の一惡癖がなほつたのである。即ち道德的感化の及んだ所である。

「おのぶさんは何でもよく出來ますが、」——其の人の知識の總價である。

「前には算術だけよく出來なかつたのですが、それを残念に思つて、くちでも……近頃では、どんな問題を出されても、きつと出来るやうになりました。」——この子の價値はたゞに天才に基いたのでなく、努力によつてかち得たものであることが分かる。

「私も算術が下手ですから、おのぶさんのやうに、此の間から毎日勉強してゐます。」——おのぶさんの感化の及んだ所である。

「おのぶさんは、本を読む時でも、字を書く時でも、いつもしせいを正しくしてゐます。」——姿勢の徳の實行者であることがわかる。

「おのぶさんの髪は毎朝自分で結ぶのなさうです。」——自分のことは自分でするといふ所謂自營心に富んだ子であることが分かる。

「爪もいつもきれいに切つてゐますし、手や足のよごれてゐるものを見たこともありません。」

——清潔の徳をよく守つてゐる子である。

「おのぶさんは誠にやさしい人で、弟や妹をよくかはいがり、」——姉として道をよく盡してゐる子である。

「友達にも親切です。」私が病氣で學校をやすんだ時などは、大そう心配して度々見まつてくれました。——朋友に對しても亦誠のふかい子であることがわる。

「人の悪口などは決して言つたことがありません。」——性質の正しい温良な子であるといふことがわかる。

以上の諸點は十分感銘させなければならない。

尙作者が此の文を草するのに、

1、おのぶが何でもよくできるといふことを單に其の子の天才に歸せず、不得手の算術を提出して其の子の努力にも基いたことにしたこと。及び

2、一女兒がおのぶさんのために、自分の朝寢の癖が直つたといふ風に感化的方面のことも取り入れたこと。

は誠に細心な注意で、どれだけ此の文章の包含と價值とを高めて居るかも知れない。其の他思

想表現の形式に於ても先づ綜合的におのぶの人爲りを叙し、次に分解的に叙し、最後にまた綜合的に收結した所もよき注意である。本文に於てはこれ等の點も閑過してはならない。

區分

第一時 第一・二節(自百十一頁四行)を授く。

第二時 第三・四節(自百十二頁五行)を授く。

第三時 第五・六節(自百十三頁七行)を授く。

第四時 全文の復習及び應用。

教法

第一時

▽第一・二節を授く。

一、目的を告げ、各自をして自由に一讀させる。

二、質疑に應答する。また主要の語句・語法等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませる。

四、内容につき問答する。

第一節 1、おのぶは級長(價値の總合的表現)であること。

2、毎朝必ず友をさそふこと(信義)。

3、さそふ時間も、登校の時間もちゃんとしまつてゐること(規律)。

第二十九 一 おのぶさん

第二節——おのぶさんによつて朝庭の習癖がなほつたこと(感化)

〔注意〕 以上は一・二節混同して記したのであるけれども、實際に於ては節を逐うて授ける。

五、読み方の練習。

指名して——また各人自由に。

六、漢字等の書取。

級長 友達 學校 時間 授業 十分ぐらゐ……等。

第二時

第三時

共に第一時に準じて授ける。

第四時

▽全文の復習及び應用。

一、全文を自由に一讀させる。

二、質疑に應答する。

三、内容につき問答。

各節につき先づ一讀させる——次に靜かに内容を捕捉させる——次に考察批判を行ふ——次に

適當な暗示の下に反省させる。(批判すべき要點は「文章」の部参照)

四、誦讀の練習。

指名して——また各人自由に。

五、練習應用。

- (1) おのぶさんはきまりのよい子であつたことはどうしてわかるか。
- (2) おのぶさんは姿勢のよい子であつたことは。
- (3) おのぶさんはうまれつき賢い子でもあつたらうが、算術なんかは勉強してよくなつたことは。
- (4) おのぶさんが兄弟の道をよく守つたことは。
- (5) おのぶさんは友だちに親切であつたことは。
- (6) おのぶさんはきれいな子であつたことは。
- (7) おのぶさんは本當に心の正しいよい子であつたことは。

教授上の注意

- 一、本課は前にも言つたやうに、一人の模範的兒童を描いて、讀者をして不知不識の間に善良な感化を與へようと言ふ考で選擇したのであるから其の積りで取扱はなければならぬ。
- 二、本課は無論假作であるが、併しそれとよみて取扱ふことは面白くない。作者の内面にある理想的兒童を現實化したので、従つて流れる生命はどこまでも作者其の人の眞實性であるといふ信念の下に生命ある取扱をなさなければならぬ。

三、本課を取扱ふには、(一)餘り嚴密に批判などさせないで、おのぶの言動として感銘を以て讀んで行くうちに各自々に反省させて行くといふ取扱法と、(二)さうでなしに多少嚴密な意味で道徳的批判を行ひ、其處に感銘させ、反省させて行くといふ取扱法とある。いづれも意義ある方法であるが私共は乙者に従ふことにした。それはさうすることに於て都合好き教材であり、またさうした指導も讀本教授上必要を認めるからである。

四、教材の区分は強いて全體法によらなくてもよい。勿論區切るといふことは面白くないけれども、他人の行動を理知によつて考察するとき、勢ひ分解的になるは止むを得ないのである。只そこに區切つた一部が全部の一部として取扱つて行く態度でさへあれば、生命の連續が斷絶されるといふ懸念はない。

第三十 旅行先より

要旨

形式上では、難語句の意義、語法等に關する知識、紀行的書簡文の認め方等につき授ける。内容上では本書簡文を通して、富士山の清い姿、名古屋城に於ける金の鯨の壯美、琵琶湖の美しい風光を感味させる。

教材

一、語句

「旅行先」旅に出でその宿泊して居る處をいふ。「御殿場」驛の名。「富士山」駿・甲・相の三國に跨り、盤周四十里、高さ一萬二千三百餘尺ある。本州の中部に座位を占め、前面に蒼海を控へ、四方の諸山は皆其の下に位して居る。山姿端麗で、また崇高で、實に世界に誇るべき名山である。「すそ野まで」こゝでは富士山の麓の廣い原野即ち裾野までの意。「金のしやちほこ」「しやちほこ」は海獸の名で、全身黒色又は灰色で、大なるは五六尺に及ぶ。兩の鰭は翅の如く、脊に鬣刺あつてそれが尾にまで連つて居る。波上に躍つたとき日光が之に映すると金色に見えるといふ。古から火災を祓ふために宮殿・樓門等の兩端に置く鷗尾なるものは、この海獸を象つたものだといふ。名古屋城にある金のしやちほこは、高さ八尺五寸、胴のまはり七尺五寸で、南の方に置いてあるのは雌で、北の方に置いてあるのは雄である。これを造るに慶長小判一萬七千九百七十五兩を要したといふ。「お城」名古屋をいふ。「天主閣」城郭の一部をなす建築物で、櫓の類に屬し、殊に高大なものは三層又は五層・七層からなる大抵本丸の中央に造つてある。「加藤清正」尾張の人で豊臣家に事へて忠勤を勵んだ人。後徳川氏に屬したけれども、豊公の舊恩を忘れず、常に身を以て遺子秀頼を守護した人である。「琵琶湖」古は單に淡海といひ、又近江の海といつた。今は専ら琵琶

湖といふ。南北十七里、東西は六町乃至六里、面積凡そ四十六方里あるといふ。湖中に魚ノ島・沖ノ島・竹生島・多景島等散在し、風光極めて美である。また湖上には汽船常に往來して交通の便が大に開けて居る。湖邊に所謂近江八景がある。「彦根」彦根驛をさす。「大津」大津驛のこと。「三井寺」大津市の西隣なる長等山の麓にある。園城寺の一稱で天台宗門派の本山である。山腹に高く峙つたものを三井寺観音といふ。西國三十三番の札所である。三井寺の晩鐘は八景の一である。

読み方の上に注意すべき語句

行きます 富士山 三百年程前 彦根の邊 野原の中 大津で下りて 三井寺

三、文章

本文は旅信と見てよからう。旅信は主として旅行中に於ける行動・見聞を通信する一種の文章即ち書簡である。

本課に於ける旅信は東京を發し京都に至る汽車中の見聞を、自分の親友に通信したものであらう。旅信をかく機會については、汽車中でかく場合と、宿屋でかく場合と其の他とある。が本旅信は内容上から考へて汽車中でかいたものらしい。即ち(一)は御殿場を通過してから汽車中で、(二)は名古屋を通過してから汽車中で(三)は琵琶湖の風光を賞しながら矢張車中でかいたものであらう

旅信は一般的に言つて簡明でさうして感興的であるのがよい。此の點から見て、本文は

- (一)富士山については清高な姿を、
- (二)名古屋城については名高い鯉を、
- (三)琵琶湖については美しい風光を、

簡短な記述の中によく表はしてある。換言せば簡明で而かも情趣に富んでゐる。先づ上出來の旅信と言つてよい。

本文に對し強ひて欲望を言へば、通常葉書又は繪葉書にかくとして、今少し簡短で且感興的のものにして數も五つか六つ位にして欲しかった。殊に編者の考の中に地理的知識をも授けたいといふのであるから、尙更其の必要を認めるのである。

區分

- 第一時 (一)の文を授く。
- 第二時 (二)の文を授く。
- 第三時 (三)の文を授く。
- 第四時 全文の復習及び應用。

教具

富士山・名古屋城・琵琶湖等の掛圖又は繪葉書。

教法

第一時

▽(一)の文を授く。

- 一、目的を告げ、各自をして自由に一讀させる。
- 二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませる。
- 四、内容につき問答(掛圖又は繪葉書類を提示して)
 - 1、旅行の目的につき。
 - 2、汽車にのつてゐる時の氣分。
 - 3、富士山の秀麗な姿につき。
- 五、讀み方の練習。
- 六、對者等につき問答。

- 1、對者は。
- 2、認めたとき。
- 3、葉書か手紙か。

七、漢字等の書取。

富士山 京都 ちの所 珍らし 天氣 汽車 眞白……等。

第二時

▽(二)の文を授く。

第一時に準じて授く。

第三時

▽(三)の文を授く。

第一時に準じて授く

第四時

▽全文の復習及び應用。

- 一、全文を自由に一讀させる。
- 二、各文につき質疑に答へ、また主要の語句等につき問答する。

三、次の如く問答する。

- 1、こゝに三つの手紙があるが、それは
- 2、(一)の富士山についてはどうかいてあるか。読んで答へて見よ。
- 3、(二)の金のしやちほこについては。読んで答へてごらん。
- 4、(三)の琵琶湖については。読んで答へてごらん。
- 5、此の手紙の相手はだれだらうか。
- 6、どんな時にかいたのでせう。
- 7、あんな風の手紙をかくときには、どんなことに注意せねばならないか。

四、誦讀の練習。

一つ一つにつき指名して、また各人自由に。

五、家庭課題

この種の経験あるものをして、此の文から得た暗示に基いて自由に綴らせ、それを模型の葉書にかいて提出させる。

教授上の注意

- 一、本課は言ふ迄もなく書簡の一體とも見るべき旅信につき、之に關する知識を與へ、併せて地理的知識をも養はうといふ目的から出來た文であるから其の考で取扱はなければならぬ。
- 二、書簡の教授は普通文とは稍々趣を異にし、必ず其の對者を意識させて讀ませなければならぬ。

ない。そこで本書簡に於ける對者は色々に考へられるが私共は本文の内容上から考へて自分の親友(尋四位の)に送るもの即ち友達を對者にしたものとし、取扱ふ考である。

三、また本文は一遍に巻紙にかいて送つたものか、それとも封緘はがきか又は普通の葉書かにかいて三遍にして送つたものか。換言せば一遍の一本か、三遍の三枚かといふことである。私共は本文の内容上から考察して

- (一)のは——御殿場を通り過ぎてから汽車中にかいたもの。
 - (二)のは——名古屋を通り過ぎてから汽車中にかいたもの。
 - (三)のは——琵琶湖の風光を賞してから矢張汽車中にかいたもの。
- として取扱ふ考である。一遍の一本だといふ人もあらうが、本文の内容上から考へてどうしてもさう取りにくいのである。

四、本課には讀替文字が二・三字あるけれども、先づ練習文と見て取扱つてよい。練習文の取扱については屢々言つた筈だから参照ありたい。

五、本課の内容に附帶して富士山につき、名古屋城につき、琵琶湖につき、地圖、寫眞等を準備して、適度の程度で補説することも無用でなからう。

第三十一 橘中佐 (一)

第三十二 橘中佐 (二)

要旨

形式上では、新文字の読み方・書き方・難語句の意義、語法其他につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、彼の軍神廣瀬中佐と共に皇國軍人の模範と仰がれし橘中佐の遼陽に於ける壯烈なる最期の有様を知らしめて、感激の情を高め、傍ら、尙武の氣象を、忠君愛國の志操を養ふを以て要旨とする。

教材

一、文字

「譽」——形聲文字で、善美なる聲聞、即ち善きウツサの義である。音は「ヨ」で、訓は「ホマレ」である。

「征」——形聲文字で、行つて伐つ義である。漢音は「セイ」、吳音は「シヤウ」で、訓は「ウツ」・「ユク」等である。

「從」——會意文字で、したがひ行く義である。轉じてツク・シタガフ等の義となつた。漢音は「シヨウ」、吳音は「ジュ」、慣習音は「ジュウ」で、訓は「シタガフ」等である。

「率」——象形文字で、本義は鳥を押へる網を象つたのである。後轉じてシタガフ・ヒキキル・オホムネ・クラブル等の義となつた。漢音は「シユツ」、吳音は「シユチ」、慣習音は「ソツ」で、訓は「ヒキキル」・「シタガフ」・「オホムネ」等である。

「斬」——會意文字で、たちきる義である。漢・吳音は「サン」、慣習音は「ザン」で、訓は「キル」である。

「旗」——形聲文字である。熊や虎の威にあやかつて其の象を畫いたハタのことである。轉じて一般に於けるハタの總稱となつた。漢音は「キ」、吳音は「ギ」で、訓は「ハタ」である。

「滅」——會意形聲文字で、水の盡ける義である。後には廣くホロビキユル義となつた。漢音は「ベツ」、吳音は「メチ」で、慣習音は「メツ」で、訓は「ホロブ」・「ホロボス」である。

二

「曹」——會意文字で、本義は獄舎の義である。轉じて裁判官・群衆・役所・局室等の義となつた。漢音は「サウ」、吳音は「ザウ」で、訓は「ツカサ」・「トモガラ」等である。

「失」——形聲文字で、本義は手から物がはなれ落ちる義である。漢音は「シツ」、吳音は「シチ」

で、訓は「ウシナフ」・「アヤマツ」等である。

「占」——會意文字で、卜筮を見て、吉凶を問ひ知る義である。轉じて取りしむ義ともなつた。音は「セン」で、訓は「ウラナフ」・「シム」等である。

「殿」——形聲文字で、本義は物を撃つ聲である。轉じて莊嚴なる堂層、シンガリ等の義となつた。漢音は「テン」、吳音は「デン」で、訓は「トノ」・「シンガリ」等である。又和義でドノ(尊稱)ともいふ。

「丁」——形象文字で、草木繁茂の貌である。轉じて壯年・召使等の義となつた。漢音は「テイ」、吳音は「チャウ」、唐音は「チン」で、訓は「ヒノト」等である。

「特」——形聲文字で、牡牛の義である。獨に通じてヒトリの義となり、轉じて殊に・取分けて等の義となつた。漢音は「トク」、吳音は「ドク」で、訓は「ヒトリ」・「コトニ」等である。

二、語句

一

「橋中佐」橋周太といひ、長崎縣南高來郡千々岩村の人である。詳細は備考部参照。「東宮武官」皇太子附の武官で、常に殿下に奉侍して、威儀裝飾を奉助し、演習又は軍事の節に扈從する。「第二軍ニ從ヒテ」奥大將の率ゐし軍隊。「遼陽の戰」備考部参照。「敵ハ山ニヨリテ」この山は首山

堡をさす。敵は勿論露軍である。「劔ノ林ヲ以テ」劔の竝べ立てるを林の立つてゐるのに比べた所謂直喩法である。「身ハ鐵石ニアラザレバ」身を堅きものに譬へたのである。修辭上陰喩法に屬する。「新手」まだ戰はないで疲勞せぬ兵士をいふ。「ヒルメル色ナク」よわつた色なく」に同じ。

二

「ザンガウ」敵の攻撃に對する防禦物の一種で、溝を穿ち、其の除土を推積して胸牆を構成するのである。掩堡・平行濠・攻路・對濠等いろ／＼ある。「氣ヲ失ヘリ」正氣がなくなつたのをいふ。「正氣附キタリ」氣がたしかになつた。「突撃」突進してうつこと。「形ヲ正シテ」姿勢を正して、「軍人ノ面目ナリ」「面目」はメイボク又メボクともいふ。世の人にあはす面、又は人の世に立つて譽を保つ意である。「馬丁」伊東金次郎をいふ。「砲撃・銃撃」大砲や小銃の音をいふ。「適中」うまくあたること。「橋中佐ハ平生志堅ク勇氣ニミチタル軍人云々」備考部参照。「ウベナリトイフベシ」實にそのとほりといはなければならぬ。

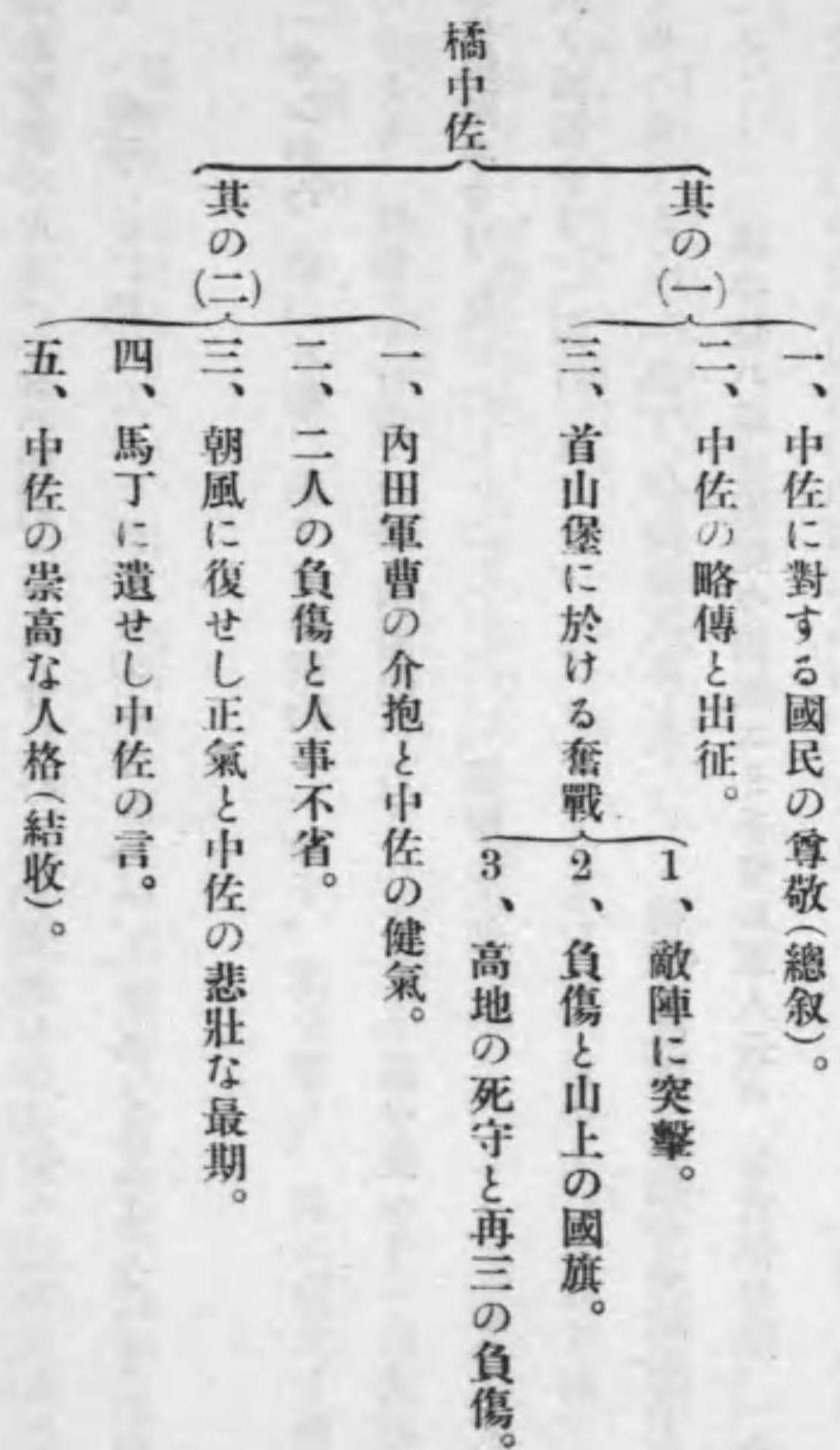
讀み方の上に於て注意すべき語句

多カリシ中ニ	二人	劔ノ林	三人	斬倒ス	軍刀	山上	朝日ノイマダ上ラザ
ル	三方	數知レズ	新手	大音ニ	一度	一步	數度
ノ下	ガケカラカケ下ル	一息	二人ハ一度ニ	朝風	正氣附キタリ	討死スルハ	

面目 めいもく コレヨリ先 コレヨリ 馬丁 ばてい 夜明頃 よあけどろ 其ノ言 そのことば 平生 へいせい 志堅ク こころざしきた 平生ノ行アリテ へいせいノことば

三、文章

本文は言ふまでもなく誠忠の人橋中佐の壯烈な最期につき叙述したのである。構想は大要次のやうになつて居る。



要するに本文は一字一語悉く中佐の誠忠を語り、一言一句悉く中佐の至高な人格を囁いて居る

誠に悲痛な文字、また崇高な文章である。

區分

- 第一時 (一)全文の通讀。
- 第二時 (一)の文の第一・二節(自百十八頁五行)を授く。
- 第三時 (一)の文の第三・四節(自百十九頁六行)を授く。
- 第四時 (一)の文の第五節(自百二十一頁四行)を授く。
- 第五時 (二)の文の第一・二節(自百二十三頁五行)を授く。
- 第六時 (二)の文の第三節(自百二十四頁六行)を授く。
- 第七時 (二)の文の第四・五節(自百二十五頁七行)を授く。
- 第八時 全文の總括的復習。
- 第九時 練習・應用。

教具

本挿畫を擴大した掛圖 日露戰地圖等。

教法

第一時

第三十一 第三十二 橋中佐(一、二)

▽全文の通讀。

- 一、先づ目的を告げ、次に日露戦争につき、極概略と遼陽戦の大略とを話し、次に各自をして自由で全文を一讀過させる。
- 二、各節を逐うて、彼等の不知の文字等を教へて行く。
- 三、一節宛指名して讀ませる。

〔注意〕 本時の目的は主として全文の大體を漠然ながらも捉へさせるにある。

第二時

▽(一)の第一・二節を授ける。

- 一、第一節について、
各人自由に一讀——質疑に應答——主要の語句・語法等につき問答——讀み方の檢閲——自由に二三回讀ませる。
- 二、内容につき問答。
 - 1、明治三十七八年戦役とは、どこの國とどこの國との戦か。
 - 2、此の時に於ける我が陸海軍の人々はどうした。
 - 3、その中に軍神とまであがめられた人は。

の如く問答して、橋中佐の誠忠に對し國民の捧げし尊敬心につき感得させる。

〔注意〕 第二節も之に準じて授く。但し内容につき問答する時、特に中佐は今上陛下の皇太子殿下であらせられた時東宮武官として深く信任せられた人であつたことに重きを置き、崇高な中佐の人格の一端を窺はさせる。(備考部参照)

三、讀み方の練習。

一節々々に指名して、また全體を自由に。

四、漢字等の書取。

明治三十七八年の戦役。 名譽の戦死。 軍神。 皇太子殿下。 東宮武官。 出征ノ命。
 第二軍ニ從フ。 大隊ヲ率キテ。 参加……等。

第二時

▽第三・四節を授く。

第二時に準じて授ける。但し内容の要點及び書取るべき漢字等は次の如くである。

(一)内容の要點。

敵兵からの猛烈な射撃。
 敵陣への突撃。

中

第三十一 第三十二 橋中佐(一、二)

第三節 敵は劔の林を以て我が軍をむかへしこと。

中佐眞先に立つて敵中になど入り敵三人を斬倒せしこと。

第四節

敵戦雨中、中佐右手に傷を受けしこと。

佐の奮戦

(二)漢字等

彈丸 傷ヲ受ク 軍刀 部下ノ兵士 日ノ丸ノ旗 朝日 陣地 突撃 劔

ノ林 眞先キニ立ツ 斬倒ス……等。

〔注意〕 第四・五・六・七時も第二時に準じて授ける。而して各内容の要點は教材の「文章」の部を参照し、漢字等の書取は適當に考へて課する。新文字については必ず運筆の順序を知らしめる。

第八時

▽全文の復習。

一、各人をして自由に一讀させる。

二、質疑に應答する。

三、次の問を讀んで答へさせる。

- 1、桶中佐が國民から深く尊敬されてゐたことは本のどこにどう表はれてゐるか。
- 2、中佐は平素から品行方正で、忠義の意深く、部下を愛するの情に厚く、東宮武官として深く信用されてゐたことは。

3、中佐が敵陣の中に躍り込んで敵三人を斬り倒し、右の手を負傷せしもひるまず、左の手で軍刀をふるひ、遂に首山堡の上に日章旗を立てた勇しい活動は。

4、心はいかに堅くとも、身は鐵石でないから、敵の三方から打ち出す砲彈に中つて我が兵はどしどし倒れる。中佐は、國旗を立てた此の高地！假令全滅すとも敵手に渡すな。退くな。と怒叫して敵を撃退し、併し敵の一彈をうけて、遂にどつと倒れたその悲壯なる活動は。

5、内田軍曹は中佐を抱いてさんごうの内に入つた。更に中佐を背負うて崖に降りた。ホツと一息つく折から一彈また飛び來つて、二人の胸を打ち貫き、二人は人事不省になつた悲惨な光景は。

6、冷たい朝風に二人は正氣附いた。敵の突撃の聲は盛に聞える。「中佐は折角犠牲を拂つて取つた陣地が。敵、敵の手に歸するか。」と残念がり形を正して「八月三十一日！今日は我が皇太子殿下の御誕生日である。此のめてたい日に討死するといふことは軍人の面目だ。」と言つて遂に息絶えた壯絶悲絶の光景は。

7、中佐が馬丁にのこされた悲しい物語は。

四、誦讀練習。

よく意味を意識しながら各人をして自由に一・二回讀ませさせる。

五、構想上につき問答する。

第九時

▽練習應用。

一、漢字の書取。

戦役 名譽の戦死 出征 参加 突撃 斬倒 軍刀 日ノ丸ノ旗 高地

第三十一 第三十二 桶中佐(一、二)

全滅 擊退 奮戰 破片 軍曹 氣ヲ失フ 占領 皇太子殿下 面目 馬

丁 苦戰 不幸 壯烈 軍神……等。

〔注意〕あとで各語句の意義をもきく。

二、次の文語を口語に直させる。

軍神トマデアガメラレタリ	皇太子ニアラセラレシ時	頃ナリキ	鐵石ニアラザレバ
起上ラントス	氣ヲ失ヘリ	取返サル、ニアラズヤ	戰死セン
キ	軍神トアガメラル、モウベナリトイフベシ		不幸ニモ適中シタリ

三、話方の修練

指名して話さしめて、話すことの修練を行ふ。

教授上の注意

- 一、本課に於ける中心生命は言ふ迄もなく、橋中佐が君の爲めに、國の爲に一身を犠牲にした尊い奉公心がそれである。従つて教授に於ても其の考で取扱はなければならない。
- 二、本課の教授に入る前に、日露戦争の概略、遼陽戦の大體につき話すことも是非必要であらう。また教授に入つても必要な所で、必要な事實を補説することの必要をも忘れてはならない。例へば

「海軍ノ廣瀬中佐、陸軍ノ橋中佐ノ二人ハ……」の所に於て、廣瀬中佐のことを復演的に補説するが如き、「三十七年四月、出征ノ命ヲ受ケ、第二軍ニ從ヒテ戰地ニ向ヒシガ……」の所に於て、中佐が大命を奉じて出征の途上、名古屋の一教授に送つた手紙のこと。及び自國を發するに及んで自宅に發した電報などのことを補説して、中佐の堅き決心のあるところを知らしめるが如き、(備考部参照)

「橋中佐ハ平生志堅ク勇氣ニミチタル軍人ニシテ、部下ヲアハレム心モ深カリキ。」の所に於て、(中佐の平生の行動を具體的に補説するが如き(備考部参照)はそれである。其の他に於ても補説すべき所が多くある。併し補説は詳述の意味でなく徹底の意味がある。誤つてはならない。

三、本課を授ける際、戰地圖を用意して貰ひたい。併し之によつて詳細に説くといふ意味でない遼陽の位置、首山堡の位置等を全體の上から知らしめればよいのである。一體戰記文のやうに時間的のものは、全く空時を離れることは明瞭をかく。殊に戦争は時間的の激動が地上といふ空間の上に行はれたものであるから、全く地圖を離れるといふことは面白くない。

四、本文は戰記文の模範として最も適當のものであるから、構想上に於ける吟味を行ふことも無用でないとする。

五、勿論比較的の言分であるけれども、本文はどうかといへば、多少程度が高過ぎると思ふ。併し然るが故に否定するのではない。かうした文章に對しては假令時間を餘計に掛けてもよいからゆつくりと讀まして、所謂讀書力をウンと練るがよい。一體讀本の文には伽喃のやうにさつと一讀過してよいものもあるし、また精密に讀解すべきものもある。本文の如きは乙に屬するものである。

備考

橋周太氏

氏は長崎縣南高來郡千々岩村の人、橋分氏の二男にして、母をちく子といふ。夫人益子嗣子一郎左衛門は共に名古屋の留守宅にあり、氏は軍人申精神教育を重んじ、忠君の念最も厚かりき。毎朝早起勸語を捧讀する事二十年一日の如く、如何なる地、如何なる場所にありても、これを廢せず。出征に當りて恭しく之を懷中より取出し、夫人に云ひけらく、時來れり。余が日夜勸語を捧讀して精神の修養に資せるものは實に今日あるを期したればなり。今實行の時は來りぬ。修養の如何を顯はすべき日なり。即ち之を汝に授く。子孫に傳へよ。」と。

氏は平素一動を慎み、常に袴を穿き嚴然たる禮儀を以て人に接したるも。温容は春風の如くなりき。氏の居間には尊き光満ちたり。床の間に兩陛下兩殿下の御尊影を掲げ、中央には東宮恩賜の小鏡を奉置せしが、日露の風雲急なるに及び、其の小鏡も他に据ゑ奉り、之に代ふるに一幅の滿洲地圖を以てし、御尊影の下に於て類に考案研究する處あり。又嘗て嗣子一郎左衛門の爲に楠木正行並に吉田松隆の肖像を室内に飾りて常に之を訓戒せり。

氏は長上と部下との別なく、能く訪問に勉め、徒歩の主義を鼓吹して、歩兵は常に歩せざるべからずと云へり。又部下生徒等と共に神社、佛閣に參詣する時には先づ自ら恭しく禮拜して、無形の教訓を與へたり。又、毎朝臥床を出づれば、必ず冷水を浴び、精神刀と銘して愛玩せる櫻の木刀を打振り、多年一日もこれを廢せず。語りて曰く、「勸語より得たる大精神は、體力に依つて初めて其の効果を見るべし。故に武人は居常勉めて體の健全を計らざるべからず。」と。

氏は又深く部下を愛せり、「新兵教育」は氏が大尉時代に物せしものなるが、その中に「入院患者を見舞ふべし。」の一節あり。曰く、「新兵に入院患者あらば、幹部は時々之を訪ひて、その病狀を見、又、其の便を圖るを肝要とす。此の事は新兵をして如何に感ぜしむべきか、予は筆舌を以て盡す能はざるなり。人あり其の子病を得て病院に在り、その心中早して如何。吾人幹部の部下に對する、將に此の如くなるべきのみ。」と。氏は之を口にしたるのみならず、よく之を實行せり。されば、往年氏の隊付となりし將校、下士卒に至るまで、今にその徳を忘れずして、書を寄するもの頻繁、氏の机上には常に數十通の書信堆積せりといふ。

氏は又質素の人なり。平素身を離さざりし勸語の淨書を表装するに絹布を以てせる外、未だ嘗て絹布を用ひず。常に清潔なる綿服を着けて小倉袴を穿きたり。ある時、名古屋の中等教育者等が熱田の某所に會合せし事あり。氏は例の服裝にて其の席に列し、平然たりしかば、美裝せる四邊の者、大に愧ぢたりと云ふ。

氏の信念は君國に報する外一もある事なし。而して氏が天命を奉じて出征の途上、名古屋の其の教授に送りし左の書は、熟語玩味せば、次て其の長將たるを思ふに足る。(前略)人の子を預り見れば、無理の通されぬ事の悲しさよ。小生は常に情に引かされ居申候。固より教育に經驗なき小生なれば、時に行き届かぬ事も可有之と存じ候へども、たゞ誠をもて押し貫かば、何時かは彼等を感化せしむべしと存じ候。教育者は子弟を眞の我子なりと思ふときは、全く彼を申す事もなからんと思ふものに御座候。小生は學校教育には更に經驗なきも、誠を推して己れの心を彼等生徒の胸中におく事は必要と存じ候。

あしざまに思ふ心は誠なる

情の道を知らぬものなり。(下略)

氏は國を發するに臨み、自宅に電報して曰く、「遺骨が來たら國へ持歸り、質素に葬式せよ。」と。又他事に及ばず。以て其の志を見るべし。ああ、氏はかゝる決心を以て敢地向ひ果して目覺しき戦死を遂げたり。痛憤堪へざるものありと雖も、氏に

在りては誠にもその志望を達したるものと云ふべきなり。(征露戦報)

遼陽の戦

遼陽は南滿洲中奉天に次ぎたる大市城にして、遠く東方より蜿蜒起伏して來れる連山脈の漸く陵夷して平野となる所にあり東南二面は山峰自然の障壁をなし、西北兩面はいはゆる遼陽千里に連なりて、一望涯なく、渾河、遼河の二水その間を曲流して自らなる壘壕をなす。その城は壁の高き六間、築くに礮石を以てし、壯觀を極めたり。而して、ロシア人はこの地を以て南滿洲に於ける根據地とし城外到る所に多くの堅牢なる防禦工事を施し、以て我が軍を掩撃せんとしたり。當時、我が滿洲軍は四個の軍團に分れたり。三軍は乃木大將之を率ゐて旅順に向へり。故にこの戦闘に参加すべきは、他の三軍團なりき。其の第一軍は黒木大將之を率ゐ、陸天嶺を超えて所在の敵を破り、遼陽街道に出て、敵の側面に進み、第二軍は奥大將之を率ゐて大石橋を略取し、海城牛莊の敵を撃ち拂ひて左翼より進む。而して、第四軍は野津大將之を提げて大孤山・岫巖柵木城を占領して正面中央より進み、一氣敵軍を突破せんとす。時まさに明治三十七年八月下旬なり。すてにして、各軍の戦線は左右相連絡して遼陽を去ること僅に十數里にあり。攻撃の機はすてに熟せるも、たゞ時滿洲の雨期に際し、霖雨連日、交通殆んど絶え、諸軍の行動敏捷を缺くに至りしかば、しばらくその鋒を收めて時の到るを待てり。すてにして、雨霽れ、天初めて朗かなり。こゝに於て、三面の大軍齊しく北進して活動を開始せり。八月二十三日、攻撃は先づ第一軍より起れり。これその進む所は山谷重なりて、しばしば行進を妨げらるべきを以て、他の二軍に後れんことを慮りたるなり。八月廿五日、第二・第四の兩軍もまた前進を始めた。かくて、各軍相呼應して驚進し、八月三十日拂曉より九月一日にわたつて、西、首山の西北脚より、東養魚池の東北高地にわたれる所の第二防禦陣地を猛烈に攻撃せり。彼我八百餘門の大砲、間断なく砲門を開きたれば、炸雲天日な蔽ひ、砲聲々として、山河悉く破砕せんとす。加之、數十萬挺の小銃の彈丸落下すること愈々多きはげし。戦況の最も慘憺たりしは首山方面にして、早飯屯、向陽子附近之に次げり。

首山は遼陽の南二里ばかりにある一村落にして、東に向陽子の高地。西に首山の丘陵時ち、自ら遼陽南西の關門をなせり。ことに首山は一に駐蹕山とも呼ばれ、三尖形にして、直立三百尺登臨すれば千里の曠野一眸の裡にあり。かゝる重要な高地なれば、敵軍は土囊を以て堡壘となし、煙臺を穿ちて觀測となし、北方遼陽に面して坂路を開き、破車・輜重を行ふに便せり。加之、山頂はもとより、山腹・山麓に至るまで、隙間なく防禦工事を施し、精銳の將卒を集めて之を固守したり。向陽子にもまた堅固なる防禦工事を施し、我が軍の攻撃に備へたり。

八月三十日、第二軍は大島師團をして向陽子方面、大久保師團をして首山方面の攻撃に當らしめたり。然るに、敵は早くも我が軍の前進を瞰下して、しきりに砲撃を加へれば、我が軍もまた數百の砲門を開きて之に應じ、或は夜陰に乗じて岩を擧ち、草にすがり、まつしぐらに堡壘中に突入し、或は一隊、長蛇の形を以て躍進し、刹へ豪雨に戦ひ、泥濘を冒し、一進一退苦戦奮闘し、數多の將卒を犠牲として、九月一日漸く之を占領することを得たり。かくの如くにして、激戦晝夜に連なれる間に、第一軍の一半は人馬蕭々として敵の側背に出づる準備をなせり。

第一軍の一部隊は、八月三十日太子河の上流を徒渉して、その右岸に出て、官屯附近に二個の軍橋を架設したれば、翌三十一日、全軍、右岸に渡りて、敵の側背に迫れり。この運動は敵の不意を衝きたる事とて、彼に多大の恐怖を起さしめ、遂にその正面の主力をこの方面に移さしむるに至れり。これ實に敵軍が大敗せし一大原因なり。これがため、第四軍もまた次ぎて敵の防禦を破り、こゝに全く遼陽を眼下に見下すべき好陣地を得たり。九月二日の夜、第二軍に屬する小川師團の主力は、大膽にも高檜の畑を潜り進みて、敵の角面堡に向ひ、夜襲を企てたり。されども、敵の防備嚴かにして容易に抜くこと能はざりき。三日更に激しき戦闘を開始し、これ強襲すれば、彼もまた逆襲し來る。かくして一進一退、高地の占領を争ひたりしが、我が忠勇なる將卒は遂に數倍の勁敵を撃ち破りて、いよいよ遼陽に迫りしかば、敵將コロバトキンは遂に諸方の敗戦に支へ得ずして退却の命令を下せり。かくて、翌三日天明より、數十萬の敵軍、陸續として北方を指して退き始めぬ。この勢を見て、いさぐち猶豫すべき。第二軍の砲兵は、間断なく停車場を砲撃して敵の北退を妨げたれば、敵の後衛部隊は更に一層の勇氣を起して、第二・第四兩軍の前進を支へんとしたり。やがて、一道の黒煙、停車場構内に立ちあがりたりと見る間に、火は早くも八方にひろがりて一風をつみ、夏雲の如き黒煙は渦をなして斜にみなぎりわたり、遼陽城市は炬に葬られんとせり。この間に第二・第四兩軍は突進して殘敵を撃破し、城外一帯を占領して凱歌を掲げ、更に城内に進入するとともに、一面敵の退路に迫

れり。實に九月四日午前零時なり。

遼陽城は遂に掌中に歸したり。然れども、敵の殿軍は前夜すでに軍橋を渡つて太子河の右岸に退くと共に、火を軍橋に放ちて悉くこれを落したり。我が軍、敵の殿軍を追うて左岸に到りしが、瀾浪滔々として岸をかみ、徒渉すること能はざりければ、暫く追撃を中止したり。第一軍は、三日拂曉、黑英臺の高地を占領して遙かに前方を望めば、此方に通ずる道路上に幾隊の敵軍連綿として原野に充ち、その砲百餘門は我が軍に向つて發砲しつゝ退却するあり。こゝに於て、之に急迫して、遂に敵をして遠く奉天の方面に退却せしめぬ。この戦の勝敗は世界の注視する所なりしが、全く我が軍の大勝に歸したり。これ實に上、天皇陛下の御稜威に基くといへども、抑もまた我が將卒の忠勇無雙なるによらずんばあらず。

第三十三 地球

要旨

形式上では、新文字の読み方、書き方、難語句の意義、語法其の他につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、地球の形状・表面の状態・水陸の分ち、氣候の變化及び我が國の位置・氣候等に關する知識を與へるを以て要旨とする。

教材

一、文字

「周」——會意文字で、用と口との合字である。本義は言を用ひるに當り用意の周到なる義であ

る。轉じて一般によく行き亘る即ちあまねき義となつて、漢音は「シウ」、吳音は「シユ」で、訓は「メグル」・「アマネシ」等である。

「圍」——會意形聲文字で、兵を以て城をかこみ守る義である。轉じて一般にカコム・メグル等の義となつた。音は「キ」、訓は「カコム」・「メグル」等である。

「湖」——形聲文字で、大附おほつけの義である。漢音は「コ」、吳音は「ゴ」で、訓は「ミヅウミ」である。

「端」——形聲文字で、立姿の正しい姿である。音は「タン」で、訓は「タマシ」・「ハジメ」・「ハシ」等である。

「極」——形聲文字で、本義は家の棟木の義である。棟木は最高の處にあるから最上・無上・キハマル等の義となつた。漢音は「キョク」、吳音は「ゴキ」慣習音は「ゴク」で、訓は「キハマル」・「キハム」等である。

「對」——會意文字で、應對の自由自在なることの義である。後コタヘ・ムクイル・匹敵者・配偶者等の義に轉じた。漢音は「タイ」で、吳音は「ツキ」で、訓は即ち「ムカフ」・「コタフ」等である。

二、語句

「地球」我等のすめる大地の稱。形圓くて球のやうであるからかく名けたのである。東西の直径が三千二百四十八里、南北の直径は三千二百三十七里、周圍は東西は一萬二百三里で、南北は一

萬百六十九里である。面積は約三千三百萬方里ある。水陸の廣さの割合は五と二である。詳細は備考部参照。「南極」地球の極く南端をいふので、太陽の光線を斜にうけ、凡そ半年間(我が國の三月廿三日)は日光をうけないから、氣候の寒冷なことは勿論である。我が國では白瀬中尉が開南丸を率ゐて、南緯七十四度の地點までいったことがある。「北極」地球の極北端をいふ。南極と同じく太陽の光線を斜に受け、凡そ半年間(九月廿三日から翌年三月廿一日まで)日光を見ることができないから、寒氣酷烈で、迎も人類の生活に適せない。「兩半球の境目の邊」熱帶地方をいふので、赤道の南北各二十三度半以内の地は、太陽常にこの南北兩回歸線の間を往復して直射するから氣候が甚だ暑い。「我が日本はごく寒い所云々」主として温帶地方にひろがつてゐるのをいふ。「四季折々のながめ」春夏秋冬その季節によつてそれ／＼雪月花のながめあるをいふ。

読み方の上に於て注意すべき語句

大きな球 高低 陸の中 平地 陸の上 水の中 南北 南半球 北半球
北極 境目の邊 年中 折々

三、文章

本文は私共の住んでゐる地球について説明したので、全文は三節から成つてゐる。第一節は先づ私たちの住む地球はまはり約一萬里もある大球で、之が大氣によつて包圍されてゐることを説

き、次に地殻即ち表面について高低あること。及びそれに基いて海陸の分ちあることを説いたのである。第二節は陸にも又高低があつて、それによつて山・谷・平地・河・湖等が出来てゐること。また同様に海にも深淺あること。及び人類や其の他の生物は陸上に、水中に、自存に適應した生活營んで棲息してゐることを説いたのである。第三節は地球を南北に分つて片方を南半球他の片方を北半球と稱すること。而して北半球と南半球とは季節が全く反對であること。及び兩半球に於ける氣候の相違につき説明したのである。説明の仕方が多少はつきりせぬ所もあるけれども私共の生活上是非知つてゐなければならぬ大切な教材である。

區分

第一時 第一・二節(自百二十五頁八行至百二十七頁四行)を授く。

第二時 第三節(自百二十七頁五行至百二十八頁七行)を授く。

第三時 總括的復習及び應用。

教具

地球儀 南半球と北半球の地圖等。

教法

第一時

▽第一・二節を授く。

- 一、目的を告げ、第一節を自由に讀ませせる。
- 二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませせる。(此の際教師は机間に入つて劣等生を指導する)
- 四、内容につき問答。
地球の周圍の長さ——地球の形——空氣に包まれてゐること——表面に高低があること——陸と海——その廣さ等につき。
五、一・二名指名して讀ませせる。
- 六、第二節を一讀させる。
- 七、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 八、讀み方を檢閲し、自由に一・二回讀ませせる。(劣等生指導)
- 九、内容につき問答。
山・谷・平地等のこと——川・湖・沼等のこと——陸上と動植物につき——海中と動植物につき。
- 一〇、讀み方の練習。

指名して——また各人自由に。

第二時

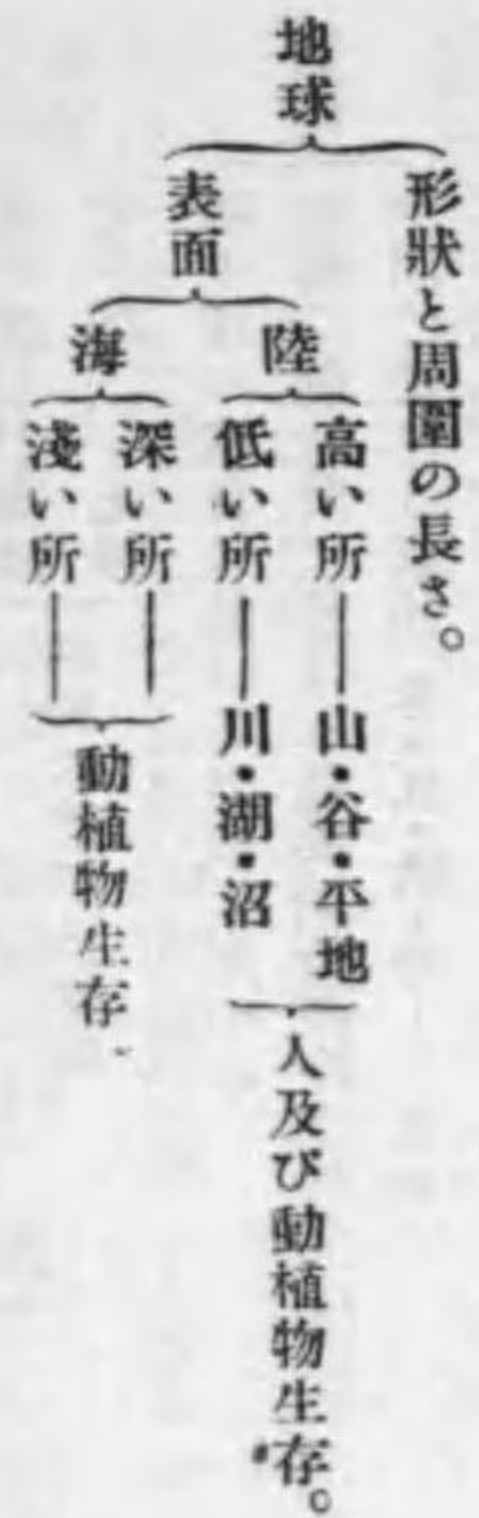
▽第三節を授く。

第一時に準じて授く。但し吟味すべき内容の要點は次の如くである。
地球を南北の二つに分つこと——南極と北極につき——北半球と南半球に於ける氣候の相違
熱帯と溫帯とに於ける氣候の相違等につき。

第三時

▽總括的復習及び應用。

- 一、全體を自由に一讀させる。
- 二、質問に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、次の要點につき問答し、またそれに相當する所を讀ませせる。



地球 南半球——南極
北半球——北極 兩極に於ける季節。
兩半球の境目に於ける氣候。(夏のみ)
兩極に近い所に於ける氣候。(冬のみ)
 氣候 中間に於ける氣候(春・夏・秋・冬——日本)

四、内容をよく意識して全文を自由に一・二回讀ませる。

五、練習・應用。

(一)漢字の取扱。

地球の周圍 一萬里 空氣に包まる 表面に高低あり 陸と海 山・谷・平地・川・
 湖・沼 動物 植物 それ／＼自分に都合のよい所に棲む 南半球 北極 南
 の端 反對 境目 氣候 四季折々のながめが多い： 等。

(二)次の問を書いて答へさせる。

- (1)地球の形は。 (2)周圍の長さは。 (3)表面の高い所を。 (4)表面の水のたまってゐる所を。
 - (5)地球を南北に二つに分けて。 (6)北半球の北の端を。 (7)日本の氣候は。
- 〔注意〕 若し時間が足りなかつたら「五」の「二」を家庭課題とする。

教授上の注意

一、本課は地球の形狀、表面の状態、人類や生物の棲息、氣候の變化等につき知らしめようとするを以て選擇されたのであるから、その考で取扱ふべきは言ふまでもない。

二、本課の内容については、學年の程度上これ以上補加することはあるまい。と思ふが併し「動物や植物が陸の上、水の中、それ／＼自分に都合のよい所に棲み、都合のよい所に生えて居る。」——といふ所で、已習の「海の動物」・「海の植物」と、また彼等の經驗・見聞と交渉して考察させるとか。また

「北半球と南半球とは季節が全く反對で……」の所で、南極に於ける晝夜の長短につき補説するとか。

等は是非必要であらう。

三、本課に於ける内容中、彼と是とは勿論輕重ある譯でないけれども、最後の所にある。

「我が日本はごく寒い所とごく暑い所の中間にあるので、氣候が餘り片寄り過ぎず、四季折々のながめが多い。」

「我が國が溫帯に位し、氣候溫和・風光明媚・天產物豊富で、實に天與の樂土である。」といふことを知らしめる上に大切な所であるから、特に意を用ひて授けたい。

四、本課はどつちかといふと知的材料に屬するから、十分理解に訴へて、その要點を記憶させる。

併し形式上の取扱も看過してはならない。

備考

地球

吾人の棲める大地の稱。形圓くして球の如くなるが故に名づく。天文上よりいへば、地球は太陽系に屬する第三の遊星の一にして、大空に懸れる一個の球體に外ならず。其の形は球とはいへど、實は正圓にあらで、東西の直徑三千二百四十八里、極直徑三千二百三十七里と稱す。其の周圍は東西一萬二百里にして、南北一萬二百六十九里なり。其の表面は陸と水とより成り陸は水より小にして、水は陸の殆んど三倍あり。陸は之を五大洲若しくは六大洲に分ち、水は之を五大洋に區別す。

昔の人は地球は平たく且つ静止せるものと考へたりしが、今日にては、人智發達して、其の球形なることと、その自轉しつゝ太陽の周圍を回轉することとは殆んど之を疑ふものなきに至れり。

地球の回轉を説明するものは、所謂地動説にして、(コペルニクス始めて之を唱へ、ケプラー、ニュートン等の大家輩出して之を大成す)地球の南北を通ずる假定の線を地軸といひ、地球は之を中心として獨樂のまはるが如く、たえず西より東へ向つて回轉す。之を自轉と稱し、其一回轉に二十三時五十六分四秒、即ち一晝夜を要す。(其の速度は赤道に於て一晝夜に一萬二千三百里を走るが故に、一時間に約五百拾二里餘の割合地球はかく自轉をなすと同時に、又太陽の周圍を西より東に向つて回轉しつゝあり。之を公轉と稱す。公轉の線路は橢圓形にして、軌道と名づく。この軌道を一周する時間は一年即ち三百六十五日四分の一なり。四季・晝夜等はこの地球の運動によりて生ず。即ち自轉によりて晝夜を生じ、公轉によりて四季の循環・晝夜の長短を起し、かゝる地球上の季候に五帶を生ずるなり。(讀本教材資料に據る)

第三十四 海と陸

要旨

形式上では、新文字の讀み方、書き方、難語句の意義、語法其他につき授けて本文の讀解に習熟させる。内容上では、地球の表面に於ける陸海の區分、及び地球を一週する時通過する海陸國土等につき知らしめるを以て要旨とする。

教材

一、文字

「洲」——會意形聲文字で、河中にある島の義である漢音は「シウ」吳音は「ス」で訓は「シマ」。

「再」——會意文字で、同一の事が二度ある義である。音は「サイ」で、訓は「フタタビ」である。

「週」——會意形聲文字で、メグル義である。今は週日の上に主とし用ひる。漢音は「シウ」、吳音は「シユ」で、訓は「メグル」等である。

「衆」——會意文字で、大勢の人の義である。漢音は「シユウ」、吳音は「シユ」で、訓は「オホシ」である。

「滿」——形聲文字で、水の海に溢れる義である。漢音は「バン」、吳音は「マン」で、訓は「ミツ」である。

「費」——會意形聲文字で、財用を散じへらす義である。音は「ヒ」で、訓は「ツヒヤス」等である。

「轉」——形聲文字で、車のめぐる義である。轉じてマハス・ウツス・コロバス等の義となつた。音は「テン」で、訓は「ウツル」・「メグル」・「コロブ」・「ハコブ」等である。特にまた「ウタタ」と訓ずる。

二、語句

「アジア洲・ヨーロッパ・アフリカ洲・南アメリカ洲・北アメリカ洲・大洋洲」備考部参照。「太平洋・大西洋・印度洋」南アメリカの南端ホーン岬を通過する西經六七度の子午線を以て太平洋と大西洋との區劃とし、アフリカの南端アグリス岬を通過する東經二〇度の子午線を以て太平洋と印度洋の區劃とする。オーストラリアの南タズメニア島の南西岬を通過する東經一四六度の子午線を以て印度洋と太平洋との區劃とする。太平洋の面積は一〇・七四五・〇〇〇方里で、大西洋は五・二九五・〇〇〇方里で、印度洋は四・七六二・〇〇〇方里である。「合衆國」北アメリカの中南部に位置する一大共和國で、面積約二百九十七萬方里ある。氣候溫和で、土地肥沃で、生産力巨大な國土である。従つて農工商は隆々として發達し、今や世界第一の高國と呼ばれて居る。「こゝに上陸して」「こゝにはサンフランシスコの港をいふ。」「四五日の間汽車に乗續くれば」汽車は大陸横斷の汽車で、紐育まで三千三百四十五哩ある。晝夜兼行で行けば八十七時間と五十分でつくといふ。「大西洋の海岸に達すこゝより再び汽船に乗りて」「こゝは」紐育をさすのである。「イギリス」

ヨーロッパ大陸の西にある島國で、其の面積は約十二萬方哩ある。國內の大富源は石炭と鐵で、工業の發達せることは世界の第一位にある。この國は全世界に廣大な鑛地を有し、世界陸地の五分の一を有して居る。一千餘萬噸の商船を有して、全世界に濶歩して居る。「フランス」歐羅大陸の西部に位して居る共和國で、面積は二十一萬方哩ある。氣候溫和、地味豊饒で、生業は農が主である。鐵と石炭に乏しいから大工業が起らないけれども、美術工藝は最もよく發達して世界に知られて居る。「ロシア國はヨーロッパとアジアとの二大洲にまたがれり」東部歐羅巴より亞細亞の北東にわたる大國で、全世界の陸地の約七分の一を占めて居る。併し歐洲戰爭の結果、國は殆ど瓦解したといつてよい。「ヨーロッパの西岸に上陸し」葡萄牙のリスボンをさすのであらう。「シベリヤ」亞細亞大陸の北部を占めて居る廣大な地域で全部露領である。面積は四百七十八萬六千餘方哩あるが、氣候寒烈で住民は極めて少ない。我が國とは密接の關係のある土地である。「ヨーロッパより汽船にて日本へ歸るには云々」フランスのマルセイユ港で汽船に乗り、地中海を過ぎ、ボートサイド港につき、これから蘇士運河を過ぎ、紅海にいで、亞丁港に立寄り、それから印度洋にいで、セイロン島のコロンボ港に立寄り、マラッカ海峽を経て、シンガポールに立寄り、支那の香港に立寄り、それから直航して長崎又は横濱につくのである。

讀み方の上に注意すべき語句

歸り來るべし

四五日の間

ドイツ等

國々

西岸

十數日

地中海

東北

三、文章

本文は前課の地球と聯絡して、尙其の表面に横はる大陸と大洋の區分、及び地球の一週と其の通過すべき海陸・國土等について説明したのである。構想は次の如くである。

第一節—陸・海の區分と我が日本の位置につき。

第二節—地球の球形とその一週につき。

陸と海

第三節—地球の一週につき。(續き)

第四節—歐洲より日本に歸る別航路について。

説明振は先づ地球の表面上に擴つて居る大陸、大洋の名稱につき知らしめ、次に地球は圓いから或一地點より出發して、方向をかへないで進んで行くと、遂に元の地點に到着するといふ斷定を置いて、それから我が國を出發して世界一週の途に上り、先きに習つた大陸・大洋を通過して、或は横目に眺めて我が國に歸り、さうしてふりかへつて見た所で、一には地球は圓いといふ觀念を實證的に明かにし、二には世界の國々は皆連續して居るといふことを覺らしめるといふ風に説いてある。而してところ／＼で停止して諸大陸の上にある文明國を紹介したることになつて居る。

區分

第一時 第一・二節(自百二十八頁八行)を授く。

第二時 第三・四節(自百三十一頁七行)を授く。

第三時 總括的復習及び應用。

教具

挿畫を擴大した地圖 地球儀等。

教法

第一時

▽第一・二節を授く

一、目的を告げ、各自をして自由に一讀させる。

二、質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。

三、讀み方を檢閲し、自由に一・二回讀ませる。

四、内容につき吟味する。(地圖及び地球儀と對照して)

(一)地球の表面上に横はる大陸の區分につき——また大洋の區分につき。

(二)地球は圓いと言ふこととその立證。

我が國出發→太平洋航行→北アメリカの合衆國に着。

合衆國で汽車にのり大陸横断→大西洋の海岸に着→乗船して太平洋航行→ヨーロッパの西海岸に到着。
ヨーロッパに於ける主なる國々と國勢の大體。

〔注意〕 先づ第一節につき授け、次に第二節に入つて授ける。また一週については適當に補説もする。

五、読み方の練習。

指名して、また各人自由に。

第二時

▽第三節を授く。

第一時に準ずる。但し内容吟味に於ける要點は次の如くである。

(三)地球が圓いといふ證據(續き)

ヨーロッパの西海岸に上陸→汽車にのつて佛・獨等の諸國を通過してロシアに入る→シベリヤ横断→滿洲に入り→我が國に歸る。

(四)ヨーロッパより汽船で我が日本に歸るには、

地中海→印度洋→支那海→日本に着。(教材の語句の部参照)

第三時

▽全文の復習及び應用。

- 一、全體を自由に一讀させる。
 - 二、質疑に應答し、また主要の語句等につき問答する。
 - 三、内容の要點につき問答して、要求點を一層確實に捕捉させる。(地圖及び地球儀と對照)
 - 四、誦讀の練習。
- 各節に指名して、また全文を各人の自由に。

五、練習應用。

(一)漢字の書取。

陸地	アジア洲	太平洋	大西洋	印度洋	東部	出發	再び元の所に歸る
二週間	合衆國	汽車に乗續くれば	上陸	滿洲	十數日を費す	航路を東北	
に轉す	……等						

(二)次の問を筆答又は口頭させる。

- (1) 陸地を分つて。
- (2) 海を分けて。
- (3) 地球が圓いといふ證據は。

〔注意〕 若し時間が足りなかつたら、「五」の(二)を家庭課題とする。
教授上の注意

- 一、本課は言ふ迄もなく知るべき材料である。だから十分理解に訴へて内容の要點を捕捉させるといふことが大切である。
- 二、本課の内容殊に地球一週を授けるとき、出發・到着の地點、通過の日數、主なる國土及び國勢等につき簡明に補説することは必要であらう。而して此の際地球儀や地圖を提示して、相對照して授けることは必ず忘れてはならない。
- 三、本課の教授が終つたら、其の知つた所を地圖と交渉して話させ、話方の修習を行ふことも賢い取扱である。

備考

アジア大陸

北は北氷洋、東は太平洋、南は印度洋に面し、西はウラル山脈・ウラル河・コーカサス山脈等によりて亞細亞に境し、南は地中海を隔て、亞弗利加大陸と相對し、西は大西洋に、北は北氷洋に臨む。面積三百八十七萬二千五百六十一方哩、海岸線は精密に計算せば五萬哩に達すべしといふ。地勢は東北に概ね平坦、西南は山多し。氣候は灣流の影響を受け、緯度に比較して概ね溫和なり、只東北部のみは寒氣強し。人口約四億あり。大部はコーカシアン人(白人種)にして、基督教を奉ず。外に猶太教を奉ずる猶太人、同々教を奉ずる土耳古人あり。世界中文運の最も達せる地域にして、地味豐饒、鐵産に富み、商工業最も盛んなり。主なる邦國は英吉利・瑞典・諾威・丁抹・和蘭・白耳義・佛蘭西・西班牙・葡萄牙・伊太利・瑞西・地太利・匈牙利・露西亞・土耳古・希臘・モンテネグロ・ルーマニヤ・セルビヤ等なり。

ヨーロッパ大陸

世界五大陸の一で、全形は半島狀をなし、東はウラル山脈・ウラル河・コーカサス山脈等によりて亞細亞に境し、南は地中海を隔て、亞弗利加大陸と相對し、西は大西洋に、北は北氷洋に臨む。面積三百八十七萬二千五百六十一方哩、海岸線は精密に計算せば五萬哩に達すべしといふ。地勢は東北に概ね平坦、西南は山多し。氣候は灣流の影響を受け、緯度に比較して概ね溫和なり、只東北部のみは寒氣強し。人口約四億あり。大部はコーカシアン人(白人種)にして、基督教を奉ず。外に猶太教を奉ずる猶太人、同々教を奉ずる土耳古人あり。世界中文運の最も達せる地域にして、地味豐饒、鐵産に富み、商工業最も盛んなり。主なる邦國は英吉利・瑞典・諾威・丁抹・和蘭・白耳義・佛蘭西・西班牙・葡萄牙・伊太利・瑞西・地太利・匈牙利・露西亞・土耳古・希臘・モンテネグロ・ルーマニヤ・セルビヤ等なり。

アフリカ

世界五大陸の一。南北五千哩、東西最大部の幅亦約五千哩、面積千六百六十二萬二千六百九十九方哩、海岸線一萬六千五百哩、人口約二億。住民は黑人種を主とし、マレイ・ホツテントット・カプア・ムーア・亞刺比亞の諸種族、及び歐洲の植民等なり。北部には大沙漠あり。南部には山岳多し。大部分熱帯に位し、南部及び北部地中海沿岸は氣候溫和、植物は珈琲・葡萄・砂糖・棉・麻・棕櫚・巨木バオバブ・動物は豹・象・犀・獅子・猴類・鱈魚・蛇鳥等、礦物は金・銀・銅・鐵・鉛・亞鉛・鹽・金剛石等あり。主なる邦國は埃及・メビヤ・アビシニヤ・モネガンビヤ・スーダン・キネヤ・ホツテントット・モザンビツク・ケープ植民地・ザンシバル・其他歐洲諸國の領地等あり。

南アメリカ

アメリカ大陸の南半部、パナマ地峽を以て北米に連る。東は大西洋、西は太平洋に濱す。面積七百七十萬方哩。人口約六千萬あり。住民は土人・黑人種及び白人種の後裔より成る。コロンビヤ・ペネズエラ・エクアドル・ペルー・智利・アルゼンチン・ボリビヤ・パラグアイ・ウルグアイ・ブラジル・キヤナ等の諸國あり。

北アメリカ

アメリカ大陸の北半部。パナマ地峽によりて南アメリカに連る。東は太平洋、西は大西洋に濱し、北はベーリントン海峽を隔

て、アジヤ大陸に對す。面積九百三十萬方哩(グリーンランドを合す)人口約一億。其の八分は白人種にして、餘はインゲアン人及び阿弗利加人種なり。加奈陀・合衆國・墨西哥・中央亞米利加諸國・アラスカ・グリーンランド等に分る。

大洋洲

我が國諸島及び馬來諸島とを除けず外、太平洋に散在せる大小無數の島嶼の總名なり。また南洋諸島ともいふ。面積合計約三百三十一萬方里、人口約一千六百萬にして、悉く歐米諸國の版圖に屬す。其の區域甚だ廣大なるを以つて、大別して四部とす。濠洲、メラネシア、ミクロネシア、ポリネシア是れなり。濠洲は其の近傍の島嶼とニューシールランドとを含み、メラネシアは濠洲の北方に接し、ミクロネシアはメラネシアと我が日本との間に散在し、ポリネシアは以上諸島の東部に散在せる諸島の總稱とす。其の他は各島嶼に住する馬來人種及び野蠻なる民族にして、食人の風を存するものあり。

大洋

地球の表面に於て大陸と大陸との間に在りて水を以て蔽はる、廣潤なる所。便宜上太平洋・大西洋・印度洋・北極洋・南極洋の五大洋に分つ。南アメリカの南端ホーン岬を通過する西經五七度の子午線を以て太平洋と大西洋とを區別し、アフリカの南端アゲリヤス岬を通過する東經二〇度の子午線を以て、大西洋印度洋とを區別し、オーストラリアの南タズメニヤ島の南西岬を通過する東經一四六度の子午線を以て印度洋と太平洋とを區別す。又此三大洋と南極圈とを以て南極洋と區別し、大西洋と北極洋とは北極圈を以て區別す。北極洋は他の四大洋に比すれば甚だ小にして、一つの綠海と稱すべく、太平洋とはベーリング海峡を以て自然に區別せらる。南極洋は近來陸地の發見相繼ぎ、其面積次第に縮少しつつあり。太平・大西・印度の三大洋は又赤道を以て南北に區分することを得。ラゲネルに據り各大洋の面積を示せば次の如し。

大洋名	面積	平均深さ	最深
太平洋	一〇、七四五、〇〇〇 ^{方哩}	一四、五九〇 ^尺	三一、六九九 ^尺

大洋名	面積	平均深さ	最深
大西洋	五、二九四、〇〇〇	一三、四〇〇	二八、一三六
印度洋	四、七六三、〇〇〇	一二、七四〇	二一、三一五
北極洋	九三一、〇〇〇	四、八〇〇	一五、九九二
南極洋	一、〇一二、〇〇〇	—	—

(以上は日本家庭百科事彙及び日本百科大辭典等に據る)

第三十五 千里の山河

要旨

形式上では、新文字の讀み方、書き方、難語句の意義、語法等につき授けて本文の讀解に習熟させる、内容上では、人智の進歩により、地上の交通は比隣のやうに近くなり、更に天空を征服して、吾等人類活動の範圍は益々擴大せしことを知らしめ、そこに雄大な氣象を喚起して、世界的に雄飛すべき精神を鼓舞するを以て、其の要旨とする。

教材

一、文字

「智」——會意形聲文字で、物事を明に知る義である。音は「チ」で、訓は「チエ」である。

「夢」——會意形聲文字で、本義は夕暮になつて、物の明に見えない義である。轉じてユメの義となつた。漢音は「ボウ」、吳音は「ム」で、訓は「ユメ」等である。

「腕」——形聲文字で、手頭の義である。後肘と手頭の間の義とする。音は「ワン」で、訓は「ウデ」「カヒナ」等である。

二、語句

「千里の山河」山を越え河を涉つて行くべき千里も隔つた遠い所も」の意。「波濤萬重」萬里をへだてた海路も」の意。「世界をちよめ」世界の距離を短かくしたといふので、即ち遠い所も僅かの日數でゆききができる」の意である。「航空機」飛行機や飛行船などをいふ。「無限の領土を新に得たり」今まで領土といへば、地上のみであつたが、しかしたゞにそれのみに限らない、空中も矢張領土である。而かも此の領土は横に縦に廣大無邊である。そこで航空機の發明ができたといふことは、つまり天空を征服して活動すべき無限の領土を新に得た譯である。こゝはこの意味を歌つたものである。「いたる所に腕を振ひて」世界いたる所に活動して」の意味。

讀み方に注意すべき語句

千里の山河	行く	萬重	新に	海陸	庭園	腕	御國
せんりやまが	い	ばんぢゆう	あらた	かいりく	ていゐん	うで	みくに

三、文章

本文は言ふ迄もなく詩の文である。音律は大體に於て七七調で、全體が三齣から出來て居る。

即ち第一齣は

山河千里をへだてた遠い所も汽車に乗ればすぐ行くことが出来る。萬里をへだてる海の路も汽船に乗ればすぐ着くことが出来る。偉大な機械の力は長大な世界の距離をも短く縮め、遠い國もまるで隣り家にも、行くやうに近くなつた。

といふ内容を歌つたのである。第二齣は

人間の知恵も限りなく進歩するもので、汽車や汽船は勿論、今や航空機の發明をも出來て、自由自在に天空をかけり、昔の人たちの夢にも知らなかつた無限の領土を新に虚空中に得た。

といふ内容を歌つたのである。第三齣は

「無限に廣い海も陸も空も、いはゞこれすべて我等の庭園である。汽車にのつて行かうが、汽船に乗つて着かうが、飛行機によつて飛びまはらうが、それは皆めい／＼の心の儘である。我等は今や世界を舞臺として、いたる所に我が鐵腕を振つて、御國のために功績を立てなければならぬ。

といふ内容を歌つたのである。要するに本詩は無限に廣大な天空を地上を舞臺として活動すべき國家心について歌つたのである。

區分

第一時 全文の通讀。

第二時 全文を授く。

第三時 復習及び應用。

教具

世界地圖 飛行機の飛揚してゐる掛圖等。

教法

第一時

▽全文の通讀。

- 一、目的を告げ、自由に一讀させる。
 - 二、各齣につき質疑に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
 - 三、讀み方を檢閲し、各自をして自由に一・二回讀ませる。(此の際教師は劣等生を指導する)
 - 四、各齣に於ける内容につき問答する。(大體に亘つて)
 - 五、讀み方の練習。
- 指名して——また各人自由に。

第二時

▽全文を授く。

- 一、各自をして自由に一讀させる。
- 二、質問に應答し、また主要の語句・語法等につき問答する。
- 三、内容につき問答。
先づ彼等の玩味した所を言はしめ、次に之に基いて教師の玩味する所をも加味して、なるだけ深く感得させる。(教材の「文章」の部参照)
- 四、誦讀の練習。
各人の自由に——また指名して。
- 五、默想。
各自が靜かに默讀しながら、各人の力に應じて出来るだけ深く内容を想起させる。
各自をしてじつと字面を眺めつゝ内容を默想させる。

第三時

▽復習及び應用

- 一、各自をして自由に一讀させる。

二、質問に應答し、また主要な語句・語法等につき問答する。

三、内容につき、問答して更に深く感味させる。

第一齣の内容

第二齣の内容

全體につき。

第三齣の内容

四、朗讀。

指名して——また一齊的に。(律動に注意して)

五、練習應用。

(一)漢字等の書取。

千里の山河	萬里の波濤	機械の力	遠き國々	人智の進歩	航空機	夢。
無限の領土	庭園	空中旅行	いたる所に腕を振ふ	御國の爲に	いさをを立てん：	
……等。						

〔注意〕複式學級では片假名で提出して、漢字に直させるがよい。

(二)語句の適用(短文作爲)。

物ともせず 自由にかけて 夢にも知らず 心のまに／＼ いさをを立てよう：

……等。

〔注意〕若し時間が足りなかつたら、「五」の(二)は家庭課題とする。

教授上の注意

一、本課は前にも言つた如く、其の目的とする所は世界を舞臺として活動すべき國家心について歌つたのである。故に其の考で取扱はなければならない。

二、本詩の格調は嚴密な七七調ではない。八調も混同して居る。併し大體に於て七七調と見てよい。元來詩は必ずしも嚴密に音律が揃はなくてもよい。(自由詩もある位だから)讀んで其處に律動があれば、それでも立派に詩たる資格があるのである。だから本詩もそれがため價値をそんするものでない。寧ろかう揃はない所に本詩の特徴がある。本詩の格調に對して云爾する人もあるけれども、さうかたくなに拘泥せなくてもよい。

三、詩の朗讀については唱歌のやうに曲節をつけて讀ませることは要らない。彼等の自由の讀振に一任してよい。併し作者の呼吸たるリズム即ち律動に従つて讀むといふ條件だけは是非守つて貰ひたい。

四、前にもたび／＼言つたことであるが、韻文を散文に改作したり、また改作させたりすることは全然止めて貰ひたい。何となれば、それは作者に對して一種の罪惡であるばかりでなく、詩

其のものの姿を破壊するからである。従つてまた詩としての本質も情趣も非常に稀薄になる。だからどこまでも詩其の儘の形で、くりかへし／＼讀む中に自づと眞味を味ふやうに取扱つて行かなければならない。

修正尋常小學讀本教授細案 卷八終

大正十年十月十日印刷
大正十年十月十五日發行

定價金壹圓九拾錢



修正尋常小學讀本教授細案

卷八

著作者

野澤正浩

發行者

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地
目黒甚

印刷者

東京市牛込區榎町七番地
本間十三郎



印刷所 日清印刷株式會社

發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目
新潟縣長岡市表四ノ町(本店)

目黒書店

(東京) 電話京橋二一六三番
振替口座二八〇九番
(長岡) 電話長岡一八番
振替口座三六一九番

2632
104

卷之四



卷之四

此卷共四十四頁
每頁每行二十二字

目錄

目錄

目錄	卷之四	四十四頁
卷之四	目錄	四十四頁
目錄	卷之四	四十四頁

大正十一年十月一日

日

目錄



終

